# 東成瀬・陸前高田・大槌 研修旅行報告書



2018年12月 秋田大学大学院教育学研究科 教職実践専攻(教職大学院)

# <目次>

2 0 1	8 年度	复研作	修加	<b>を</b> 行	引	程	等	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	1
東成瀬	小学校	交の	学村	交彭	皗	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	3
東成瀬	小学校	交の7	镁	子•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	4
東成瀬	中学校	交の:	学村	交彭	皗	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•		•	•	•	•	•	•				•	•	•	•	5
東成瀬	中学校	交の7	様	子•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•		•	•	•	•	•	•				•	•	•	•	6
東成瀬	i村教育	長	の行	<b>亍</b> 政	文説	明	•	•	•	•	•	•	•		•	•					•	•	•	•	•	•				•	•	•	•	8
高田小	学校の	)学	校記	兑明	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•					•	•	•	•	•	•				•	•	•	•	9
高田小	学校の	)様	子		•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•					•	•	•	•	•	•				•	•	•	1	0
陸前高	田市語	吾り音	部プ	ゲイ	۲,	説	明	•	•	•	•	•	•		•	•					•	•	•	•	•	•				•	•	•	1	1
陸前高	田市で	<b>ご</b> の	昼負	)	•	•			•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	1	3
陸前高	田市の	)様	子		•	•			•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	1	4
大槌町	語り音	『ガ	イコ	ド診	皗	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	1	5
大槌町	での昼	食	•		•	•			•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	1	8
大槌町	の様子	۲.	•		•	•			•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	1	9
やまゆ	り温泉	良報	告		•	•			•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	2	1
大船渡	温泉幸	6告	•		•	•			•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	2	2
院生の	振り込	<b>ヹ</b> り	•		•	•			•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	2	3
語り部	ガイト	::·	チ	ラシ	等	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	2	7
事後学	習•		•		•	•			•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	2	9
授業	等指導	享案																																
研修	等指導	享案																																

# 2018年度研修旅行日程等

9月21日(金)

10:00~15:00 事前学習会

『「想定外」を生き抜く力』群馬大学(当

時) 片田敏孝

『命と向きあう教室 – 被災地の15歳、1年の記録』宮城県東松島市立鳴瀬みらい中学校(当時)・制野俊弘

『ぼくたちわたしたちが考える復興 夢をのせて-宮城県石巻市立雄勝小学校震災2年 目の実践』徳水博志

10月18日(木)

9:00 大学出発

道の駅「十文字」経由

11:00 東成瀬小学校着

 $1\ 1\ :\ 2\ 5 \sim 1\ 2\ :\ 1\ 0$ 

授業参観・校舎見学

12:10 東成瀬小学校発

12:20 東成瀬中学校着

 $1\ 2\ :\ 2\ 0 \sim 1\ 3\ :\ 0\ 0$ 

昼食(弁当500円)

 $13:00\sim13:30$ 

学校経営説明(小学校)

13:30~13:50 質疑応答

 $14:00\sim14:50$ 

授業参観・校舎見学

 $15:00\sim15:30$ 

学校経営説明(中学校)

15:30~16:15 教育行政説明

16:20~17:15 質疑応答

17:20 東成瀬中学校発

17:40 やまゆり温泉ホテルブラン着

ホテルブラン

〒019-0803 秋田県雄勝郡東成瀬村椿川字 柳沢 39-7

TEL: 0182-47-3104 FAX: 0182-47-3107

10月19日(金曜)

6:30 朝食

7:30 ホテル発

道の駅「みずさわ川と緑の花街道」経由

10:20 陸前高田市立高田小学校着

 $10:30\sim12:30$ 

授業参観、学校等説明、質疑応答

12:40 高田小学校発

13:00~ 昼食

カフェフードバーわいわい つどいの丘店 所在地:〒029-2205 岩手県陸前高田市高

田町大隅 93-1

電話: 0192-47-4290

 $14:30\sim16:30$ 

陸前高田語り部ガイド

一本松茶屋でガイドさんと合流

陸前高田市観光物産協会内ガイド部会

FAX: 0192-54-5011

E-mail: rikutaka-kankou@crest.ocn.ne.jp

17:00 大船渡温泉着

大船渡温泉

〒022-0002 岩手県大船渡市大船渡町字丸

森 29 番 1

TEL: 0192-26-1717 FAX: 0192-26-1414

URL: http://oofunato-onsen.com

E-mail: contact@oofunato-onsen.com

10月20日(土)

8:30 大船渡温泉出発

 $1 \ 0 : 0 \ 0 \sim 1 \ 1 : 3 \ 0$ 

大槌町語り部ガイド

旧町役場(県道 280 号線沿い セブンイ

レブンの横) でガイドさんと合流

一般社団法人 おらが大槌夢広場

〒028-1131 岩手県上閉伊郡大槌町大槌

第 23 地割字沢山 37-3

Mobile: 080-8209-2330

FAX: 019-903-0396

Email: mioinusa@gmail.com

HP: http://www.oraga-otsuchi.jp

12:00 昼食

さんずろ家

〒028-1101 岩手県上閉伊郡大槌町吉里々々

第13地割9-22

電話: 0193-44-2413

道の駅「遠野風の丘」経由

17:00秋田大学着

2月 1日(金)

「学校危機管理の現状と課題」において

研修旅行概要及び成果発表

校内研修、授業・訓練プログラム(指導案)の検

討発表

本研修旅行は、平成30年度 教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業 (A教職大学院等研修プログラム開発事業)で採択された、「新たな教員育成指標と研修体系に対応し『秋田の探究型授業』の継承と発展を目指す養成・研修一体型プログラムの開発」の一環として行われました。

表紙の写真は城山公園から眺める大槌町現在の様子です。

# 参 加 者

学校マネジメントコース

現職院生1年次

猿田 尚

高橋 司

田中 紀和

山城 寛幸

カリキュラム・授業開発コース

現職院生1年次

阿部 匠

佐藤 寿美恵

柴田 恵子

学卒院生1年次

佐々木 浩子

佐藤 将太郎

澤木 瑛保

鈴木 公貴

高橋 崚介

照井 佳那子

時田 紘志

長谷川 いずも

山口 裕平

学卒院生2年次

近藤 大地

伊藤 紘成

佐藤 貴大

竹内 恭平

木村 陽平

保達 諒平

若松 彩花

発達教育・特別支援教育コース

現職院生1年次

相原 淳

池田 和馬

齊藤 徹

学卒院生2年次

保坂 迪菜

付添教員

佐藤 修司

鎌田 信

田仲 誠祐

三浦 亨

工藤 正孝

廣嶋 徹:1日目と1泊のみ

阿部 昇:1日目のみ

長瀬 達也:1日目のみ

# 東成瀬小学校の学校説明

今年度の研修旅行で、まず始めに訪問させていただいた東成瀬小・中学校は、私の進学した横手高校の友人にも出身者が在籍していた学校である。 東成瀬小学校の説明を伺い、特に印象に残ったものを二点紹介しようと思う。

1点目は「連携」である。地域との連携、保・ 小・中での連携、大学との連携など、様々な連携が 密になされていることが印象に残った。学校経営 の基本方針で。「地域とともにある学校」と示され ているように、東成瀬村の教育は地域全体で支え られている。保・小・中連携において、児童生徒の 交流のみではなく、職員同士の交流も頻繁になさ れている。また、地域だけで完結するのではなく、 秋田大学の阿部昇教授をはじめとする大学教員の 協力による授業のレベルアップや、「グローバル "夢"ミーティング」による秋田大学留学生との交 流も盛んになされている。このことにより、教員 の研修が深まったり、子供たちの視野が広く、深 くなることができるようになったりしている。東 成瀬村内外での連携を深めることで、子どもたち の生きる力はサポートされている。



東成瀬小学校授業風景

2 点目は自主学習ノートの取り組みである。東 成瀬小学校は家庭学習を重視している。「確かな学 力を身に着けるためには、その土台となる基礎・

基本となる事柄をより確実に身に着けさせるこ とが大切」とねらいで明示している通り、学習内 容はもちろん、家庭での学習習慣を身に着けるこ とも大事にしている。また、家庭学習に関するこ とをおたよりで家庭に配信したり、教員間で共通 認識をはかったりすることで、家庭・学校全体で サポートしている体制が整っている。児童の家庭 学習ノートを見学したところ、毎日担任がコメン トをしている点が特に印象に残った。学校から帰 宅してから再び家庭でも勉強することは児童の気 持ちとして、大変なことである。しかし、毎回教師 が確認印ではなくコメントを添えてくれると、自 学の内容が教師の客観的な指摘からレベルアップ することに加えて、児童のやる気や向上心にもつ ながるだろう。他にも、交換自学ノートの取り組 みで、他の友達の自学の取り組みを参考にできた り、中学生の先輩に自学の取り組みを見てもらっ たり、部門別の自学ノートコンテストを行ったり して、絶えず自学ノートの質の向上に努めている。



自学ノートの取り組み事例の掲示

今回の東成瀬小学校訪問で、他の地域や校種にも取り入れられる取り組みを多く学ぶことができた。これからの私の実践にもいかしていきたいと思う。

【教職実践専攻 1年次 佐藤将太郎】

# 東成瀬小学校の様子

東成瀬小学校を見学して最初に驚いたことは掲 示物の多さだった。玄関を通ると今月の作文、児 童が夢を描いたものを実と例えて木にしている掲 示物があり、職員室前には4月から訪問した9月 末までの行事写真、各種委員会の報告書、故郷の 伝統行事を体験したときのことがあった。中でも 驚いたのは、東成瀬中学校や保育園、児童館の通 信があったことである。このことから小中連携、 幼保小連携、機関との連携がされており、児童が 「中学校に行けばこんなことがあるのか」と中学 校に希望を抱いたり、「保育園ではこんなことを したのか、懐かしいな」と自分を振り返ってみた り、「児童館では特集がされている、楽しみだな ぁ」と児童館に行くことが楽しみになったりする ことができるのではないかと思った。また児童の 学ぶ意欲を促進するためにチャレンジピックとい うものを掲示していた。これは算数・理科・国語 から難易度が高い問題の答えを選択肢から考えて 答えを解答用紙入れに入れるというもので、学年 ごとに分かれているものの上の学年の問題も答え てもよいとなっていた。正解した児童の名前、先 生の名前も掲示され、児童が自分の可能性を知る ことができたり、授業外での学びを深めることが できたりすると思った。



1階から2階の階段の壁も無駄にせずに活用していた。こちらは自主学習ノートを掲示していた。それも上の学年からアドバイスをもらいながら、自分の自主学習ノートの使い方をよりよくし



ていくことをしていた。小学校6年生は中学4年 生からアドバイスをもらい、よりよい自主学習ノートに役立てていた。また、中学3年生の自主学 習ノートも掲示したり、ほかの生徒の自主学習ノートを廊下においていたりしていて、児童自身が 自主学習ノートの使い方を見て学ぶことができる と思った。またノートの使い方も徹底しており、 日付、自主学習をした時間、目当て、まとめをき ちんと書いて自主学習をすすめていた。そして書 いていないスペースがあるともったいないと書かれていた。

児童を思い、教師、東成瀬村全体が一丸となって児童を育てていくんだという思いを感じた。そのために学校目標を全員が共通理解し、共通実践をしていくことと、初めに児童にやり方を説明して、徹底的に行っていくことをしているからだと思う。はじめが肝心とは言うが、ここまで継続していくためには常日頃からの生徒との信頼関係の構築、生徒指導があってこそではないかと思っ

た瀬のってののた、小見たも深に。学いなるとびもった。



【教職実践専攻 1年次 佐々木浩子】

# 東成瀬中学校の学校説明

# 【学校経営の重点】

東成瀬中学校における平成 30 年度経営の重点 事項は大きく6 つある。1 つ目は、東成瀬という 地域の特性を生かした教育活動の推進である。全 校生徒数 68 名(1 年 19 名,2 年 16 名,3 年 33 名)という実態を生かした一人一人が活躍できる ような実践をはじめ、小中連携教育や多様な体験 活動の充実など、東成瀬だからこそ可能な教育活 動に取り組んでいる。

2 つ目は、仲間と共に主体的に学び合う生徒の育成である。特に、秋田県が推進している「探究型授業」を軸とした「対話」のある授業実践と、それを実現するための教師の授業力の研鑽に力を入れている。



3つ目は、心豊かな生徒の育成である。全教育活動を通して生徒の道徳性を育てるために、異質性や多様な見方・考え方に触れる学習を展開している。

4つ目は、健康教育の推進である。基本的な生活 習慣の確立することだけでなく、生涯に渡る健康 づくりに繋がる食育の推進や、防災教育の推進、 生涯スポーツの関心を高めるための保険体育や部 活動等の推進など、様々な面から心と体を一体と 捉えた健康教育を展開している。

5つ目は、志をもち、たくましく生き抜く生徒の 育成である。将来の夢や目標を実現するために努



力する態度を養うために、未来の自分について考える場を設けたり、地域で職場体験等の社会体験 学習の充実をしたりするなど、キャリア教育とふるさと教育を結び付けた取り組みを行っている。

6つ目は、積極的な生徒指導の充実である。生徒の主体的な活動を促し、日常的な生徒理解の充実に努めるなど、自己有用感の醸成や共感的な人間関係の構築に取り組んでいる。

これらの重点事項を有機的に結び付け、学校教育目標である「大志を抱き 共に学び 心豊かでたくましく生きる 生徒の育成」の実現を目指し、未来を生き抜く生徒たちの確かな成長を促して柔軟で幅広い確かな学力を保障する教育活動が行われている。

#### 【教職実践専攻 1年次 鈴木公貴】



【大沼一義校長による学校経営説明】

# 東成瀬中学校の様子



小学校からは少し離れた、東成瀬村の雄大な大自然で囲まれた場所に中学校があった。東成瀬中学校といえば、その地区に学習塾が1つもないにも関わらず、全国学力状況調査ではトップクラスといわれる秋田県の中でもトップの成績を誇る中学校である。学力がトップクラスの生徒たちを育てる教育の秘訣は何か、どのような環境でどのような教育を受けているのかについて興味を持ち、校内の様子から何かヒントが得られるかもしれないと期待を膨らませ、校内に入った。

まずは、学校の図書室で昼食をいただきながら、 東成瀬村の紹介のビデオを見させていただいた。 東成瀬村は、豊かな自然や文化があり多彩な教育 資源に溢れた環境であることが分かった。

次に、実際に校内を見学させていただいた。廊 下には、生徒たちが地域や自然や人を題材に調べ たものをまとめたポスターが掲示されていた。そ



れによると、3年間で継続したキャリア教育が行われているようであった。1年目は「地域に学ぶ」、2年目は「職業に学ぶ」、3年目は「人生に学ぶ」というテーマが設定されており、現地に取材をして調べたものを発表しているとのことであった。内容の質はさることながら、読み手を意識した伝え方も工夫されていたと同時に、一人一人興味や関心が異なりレイアウトにも個性が溢れていた。これは、毎年恒例で実施されているとのことである。



その他にも、学校の至る場所に、学びの成果をまとめたものや教育的意義のある掲示物があり、生徒がお互いの作品から学んで物の見方を広げたりできる工夫がされているようであった。特に、高い思考力を要する問題に取り組ませることでポイントを取得できる「仙人思考力コンテスト」の問題が掲示されていた。難しい問題であっても身に



付けた知識を活用して粘り強く考える力を養わせ たいという先生方の意図が感じられた。

授業の様子も参観させていただいた。1年の数 学の授業では、少人数であったが、生徒一人一人 を大切にした手厚い指導・支援が行われていた。 TT で連携して机間指導や役割演技等を行ったり、 具体物を用いてイメージしやすくしたり、適切な タイミングで「褒めて自信を付けさせること」や 「思考を促す発問や助言及び流れ」を意識したり して授業を展開していた。それに対して、生徒た ちは熱心に学習に取り組んでおり、何よりも学習 規律が整っていることが素晴らしいと感じた。こ のようにして、生徒が主体となり、問いを発しな がらみんなで協力して問題を解決していく様子を 目の当たりにした。一人一人が意欲的に学習活動 に参加して互いに考えを出し合いながら少しずつ 学びを深め合っている様子がとても印象的であっ た。



食堂では、全校生徒約70人で一緒に給食を食べられるようになっていたが、特に目を引いたのは、生徒が考えたご当地スイーツの開発の成果が掲示されていたことである。食糧をつくるところから販売するまでの一連の活動を実施しているとのことであった。

体育館は普通の中学校より広くバスケットボール部が占領でき、音響が整っているということで本校の特色の強い取り組みである全校吹奏楽でも生かせる設計となっていた。また、専用の卓球場や野球場があることも目を引いた。このように、学業以外でも安心してのびのびと活動できる環境も整っていた。





東成瀬教育委員会からの教育方針や具体的取り 組み等を説明してくださった。その内容もさることながら、教育への熱意の高さは感慨深かった。

校内見学を通して、豊かな心と学力の高さを裏付ける創意工夫を生かした取り組みや要因を目に見える形で実感することができた。

【教職実践専攻 1年次 澤木瑛保】

# 東成瀬村教育長の行政説明:共に学び合う教育

平成30年10月18日(木)~20日(土)まで、 秋田大学教職大学院研修旅行が行われた。1日目 の18日には東成瀬村を訪れ、東成瀬小・中学校を 参観した。その際、東成瀬村教育員会教育長の鶴 飼孝様に、東成瀬村の教育方針をお聞きすること ができた。

東成瀬村では様々な取り組みが行われている が、その根底にあるのは児童・生徒観であるとい う。その定義というのが、「こどもは分からない ことがあってもいい。」「こどもは間違ってもい い。」「どの子も皆、いいところがある。」の三つ である。教育長は語気強くこの児童・生徒観につ いて説明しており、それだけこの児童・生徒観を 大切にしているのかを感じ取ることができた。加 えて、後に紹介していただいた「こどもたちの様 子」においても、その児童・生徒観が大きく関わ っている。生徒の堂々と発表する様子を説明して いただく時に、教育長は「一人一人が自分なりの 意見を持ち、テストの点数が100点であろうが、 0点であろうがみんなが発表する。学校は間違う ところであり、間違うことのできる場所。」とお っしゃっていた。村全体、そして学校全体で、生 徒が安心して学習できる環境(間違えられる環 境)を作り出すことにより、児童・生徒はのびの びと学習に取り組み、堂々と発表することができ ているのだと考えた。

また、教育長はもう一つのキーワードとして「教育愛」を挙げていた。教師全員がこどもが1ミリでもよくなってほしい、成長してほしいと願い行動していくことこそがより良い教育につながっていくという。それは、東成瀬小・中学校を参観している時に感じることができた。教室掲示や校内掲示、そして授業をする先生方の熱いまなざ

しが、まさに「教育愛」の体現なのだと思われた。

秋田県内でも学力がトップクラスの東成瀬村の 教育は、明確な児童・生徒観と先生方の教育愛に 裏打ちされたものであると、教育長のお話から学 ぶことができた。また、その他にもここに書きき れなかった学びはたくさんあり、その全てを私の これからに活かせるように、今後とも精進してい きたいと考える。

## 【教職実践専攻 1年次 高橋崚介】



鶴飼教育長



教育長の話を聞く様子

# 高田小学校の学校説明

東成瀬・岩手研修旅行の日程のひとつとして、 陸前高田市立高田小学校を訪問し、学校の取り組みを拝聴した。東日本大震災があった当時は、地震や津波の情報を受け取るばかりで、震災があったことに関してあまり実感を持ってなかった。しかし、被災した子どもたちや先生方の現状やその想いから、ニュースで報道されていた事実よりもリアルな様子が伝わり、衝撃を受けた。特に学校紹介のビデオを視聴して、一面の瓦礫が広がっている風景の中で、悲しい気持ちに耐えて成長していく児童や、それを支える先生の姿に胸を打たれた。



高田小学校長から、4月の避難訓練の際に震災を思い出して泣いてしまう児童がいることや、元気な子どもの背景には亡くなった両親や友達がいることを聴いた。児童は常に不安やストレスと向き合っていることを知り、もし私が経験したことのない境遇にある児童に出会ったとき、どうすればよいのかを考える契機となった。私ができることは、これから育っていく「震災を経験していない児童」にそのときの経験や様子を語り、防災意識を高めることだと考える。地震や津波の教訓を忘れず、後世に伝えていきたい。

また、校長は、被災された児童の心のケアが最優先で、児童全員が面談を受けていると述べていた。私が今まで経験してきた児童とのかかわりの中で、些細な失敗経験や、理想と現実のギャップを感じると、心の問題を抱えることを実感してき



た。しかし、震災によるトラウマは人生で一生向き合っていく必要があるため、長期にわたる心のケアは欠かせないと思った。そのような児童の心に配慮したかかわりは、被災した児童に限らず、どの児童にも大切なことだと考える。これからも、児童とかかわることで感じられる学校生活の中での児童の動きや感情の機微に注目し、児童が学校に来ることが楽しいと思えるように支援したい。

このような児童の様子やかかわりの在り方に加えて、地域と一体となる学校教育という視点が大切だと感じた。被災という同じ経験をしたからこそ、地域全体でその思いを共有したり、学校を盛り上げていったりする力強さがあるのではないかと考える。学校やその中の教師が地域の拠点となって、人と人とをつなぐ役割を果たすことが重要



だとして、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないのでは、ないでは、ないのでは、ないでは、ないのでは、このでは、ないのでは、このでは、ないでは、このでは、このでは、このでは、このでは、こので

して、どんな教師になりたいか、どんな児童に育てていきたいかを考えるうえでとても刺激になった。この気持ちを忘れずに、教職大学院での生活に邁進したい。

【教職実践専攻 1年次 時田紘志】

# 高田小学校の様子

高田小学校に到着したそのとき、まず目に入ったのは、学校の近くを何台もの大型トラックが行きかう様子である。そして学校のある場所から海に向かって少し低くなった土地には、ほとんど何の建物もない状況であった。

私は東北に住んでいることもあり、震災についての報道や情報を見聞きする機会が多くあったと思っている。今回の研修では、震災から約7年が経ち、被災地の復興はどれくらいされたのだろうかという認識を持って訪問先に向かった。



しかし、高田小学校に到達して目の当たりにした光景は、震災について、そして被災した人たちについて、私は実際には何も分かっていなかったのだという認識の甘さを突き付けるものだった。復興はまだまだ道半ばであった。このような現地の状況を目にして参加した高田小学校の見学は、学校とはどのような場であるべきかということを改めて考えさせられるものであった。

学校を訪問した時には、午前中の授業が行われていた。習字をしている学級もあれば、学芸会で発表する演劇の練習をしている学級もあった。児童はそれぞれが元気に、一生懸命に活動に取り組んでいるようであった。学校内を見学していて印象に残ったのは、空き教室の多さである。

校長先生のお話では学校全体の児童数は震災前 と比較して約半分に減少してしまったということ だった。元気に授業を受け、遊んでいる児童の様 子ではあったが、震災によってその学校生活環境 だけでなく、友人とのつながりまでもが大きく変 化したであろうことが想像できた。

見学の際には高田小学校の先生方から、現在までの復興の歩みや、研究実践について説明をお話頂く機会があった。強く印象に残ったのは、「安心感」という言葉である。研究実践のイメージ図では、全ての活動を支える土台として「安心感」が掲げられていた。



高田小学校の先生方は、まずは学校生活の日常を取り戻すということに全力を尽くされていた。その姿からは、学校の教育課程を「あたりまえ」に実施できることがどれ程ありがたいことなのかが痛感させられた。また、「あたりまえ」の生活が、生徒の心を安定させる「安心感」ためにどれ程重要であるのかを考えさせられた。

私は、高田小学校の訪問から、学校は、地域のシンボルとして多くの人に「安心感」を与えられるような場でなくてはならないと感じた。学校は、非常時には避難所になるというだけではなく、生徒やその保護者、地域の方が安全・安心を求めて集まり、心の拠り所にする場でもあるといえるのではないかと思う。教師として現場に立った時には、安心・安全を保証できる学校づくり・学級づくりができているのかどうかを、自分自身に問い続けていきたいと思う。

【教職実践専攻 1年次 照井佳那子】

# 陸前高田市語り部ガイド説明

研修旅行2日目である10月19日(金)に陸前高田市観光案内所の語り部の方に、震災で得た教訓と防災についてガイドしていただいた。

陸前高田市は、岩手県の東南端、三陸海岸の南の玄関口として、大船渡市、住田町、一関市、宮城県気仙沼市に接し、宮城県との県際に位置している。2011年3月11日、東日本大震災が発生し、高さ約15mの津波が市を襲った。津波は一瞬にして町や物、人を飲み込み、津波が去った後はまっさらな土地になっていた。私たちは、東日本大震災追悼施設で追悼後、復興まちづくり情報館を訪れ、そこに展示されている写真や映像を見たときに改めて、自然の脅威に鳥肌が立った。

語り部の話の中で印象的だったのが、「町の人々が津波から逃げなかった理由として、防潮堤(5,5m)があるという過信があった。」と仰っていたことである。ラジオや放送から流れてくる情報(3m以上)を鵜呑みして大丈夫だと腰を据えていると、今回のような想定外の事態が起きたときに適切な判断や行動に遅れが生じてしまうのだと学ぶことができた。



地震や津波などの災害に関する正しい知識を持った上で、主体的に判断し行動するという意識を 学校の教職員や児童一人一人がもつことが大切に なると考える。災害が発生した際、事前にどこへ 避難するのか、どのように行動するのかなどの避 難経路や場所等を把握し、主体的に判断し行動す ることが自分の命を守ることにつながるとともに、 誰か一人が率先して避難する姿が、周りの人々の 避難の意識を高め、自分の命を守ることに加え、 周囲の人々の命を助けることにつながると感じた。

最後に、今回のような災害はいつ、どこでおきるか分からない。常に自分たちの身に降りかかってくるという意識を高くもたなければいけないと強く感じた。来年度から学校の教員として、子どもの命を預かることになる。今回の研修での学びを生かして、「もしも」の時に、よりよい判断を瞬時にできるよう、日頃から準備を怠らないようにしていきたい。

### 【教職実践専攻 2年次 近藤大地】



http://www.pref.iwate.jp/engan/ofuna\_nourin/031816.html



震災前の高田の松原

http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/kategorie/fukkou/ip ponmatu/takata-ipponmatu/takataipponmatu.html

陸前高田で、語り部ガイド河野正義(陸前高田 市観光物産協会内観光ガイドの会) さんにお話し いただいた。バスに添乗いただき、実際に陸前高 田をまわりながら震災当時の状況を説明いただい た。説明では、高田町の東側に位置する旧下宿定 住促進住宅は、津波が襲ってきた際には、5階建 ての4階部分まで浸水したとのことであった。建 物を実際に見ると、津波の高さと威力を改めて感 じた。事前にどのような被害であったか知識とし てもっていても、実際に被害の状況を目の当たり にすると、言葉では言い表すことのできない当時 の凄まじい状況を感じた。また、実際に被災され た方々の話を聞いたり、追悼施設などで手を合わ せて黙祷したりすると、震災を通して人々が感じ た悲しみや苦しみ、無念さなどが伝わってくるよ うであった。東日本大震災がどのようなものであ ったかを知るとは、その状況を映像で見たり、情



報を調べたりするだけではなく、実際にその場へ 足を運ぶことが非常に大切だと感じた。教員になったときには、実際に子どもたちを現地へ連れて 行ったり、当時のことを知る人にお話しいただく など生の声を聞かせたりすることを大切にしてい きたいと感じた。

ガイドの方のお話のなかで、最も強く印象に残



っ一高万が本が1理にテたの松松の津残さのとっとはいいに、を流本由あれたがに、たがてユラのとっとす。残、一建のののののではあよす。残、一建のののでではあます。残、一建ののでではあます。。

より、津波の力が分散されたことや、他の松よりも下枝がなかったことがあるようだ。その一本松は、海水の影響で枯死してしまい、翌年切られたが、現在は人工処理を行い、モニュメントとして整備されている。この一本松が、この地域の人々の希望となっている。人々の心の支えになるものを残し、それを大切管理にしようとする地域の思いに心を打たれた。

今回の研修を通して、東日本大震災で得た教訓をある特定の地区だけの教訓にするのではなく、 あらゆる地域の教訓として未来へ語り継ぐことが 大切だと感じた。

【教職実践専攻 2年次 伊藤紘成】



# 陸前高田市での昼食

研修旅行二日目。陸前高田に向かう道中,青く 澄みきった秋空と,彩り始めた木々は秋の訪れを 身近に感じられた。

陸前高田市の状況については、新聞やニュースなどの報道で何度か見たことはあったが、実際に訪れるのは今回が初めてであった。実際に見て、地震や津波の威力がこれほどまでに影響するのかと胸が痛くなった。

お昼は陸前高田市にある「カフェフードバーわいわい」というお店に行った。

料理が到着すると、店主が「がんバーク定食」「ホタテ塩ラーメン」「ホタテとまぐろの漬け丼」に込められた思い、そして震災当時について話してくれた。



カフェフードバー わいわい

店主は大変明るく、どんな時でも前向きな気持ちでいればという強い気持ちを持っている方だった。地元の材料をつかって、街が賑やかになることを強く願っていた。まだ、すべてのメニューに地元の材料を使うことはできないが、使える日はそう遠くないだろうと言っていた。

いつか地元の材料を使える日がきたときには,

またここに訪れたいと感じた。どの料理もおいしく, 店名通りみんなでわいわい過ごすことができた。



がんバーグ定食



ホタテ塩ラーメン



ホタテとまぐろの漬け丼 【教職実践専攻 1年次 長谷川いずも】

# 陸前高田市の様子

10月19日の研修2日目は、陸前高田市で主に防災教育についてと陸前高田市の復興と現状について学んだ。私は中でも、19日の午後からについての感想を述べたい。

まず、語り部ガイドの前に時間があったので、 「奇跡の一本松」を見学に行った。この「奇跡の一 本松」とは、陸前高田市の沿岸部に約7万本もの 松並木があったが、東日本大震災の津波に耐えて 奇跡的に残った1本の松のことである。実際に「奇 跡の一本松」を拝見すると、たった1本の松なの に、その松から感じる迫力や堂々とした姿に圧倒 され、言葉を失った。今は、復興のシンボルとして 多くの人の心を癒したり、明日への生きがいとな ったりしているのだと思う。あの日を忘れない、 あの日の出来事を後世に語り継いでいくという意 味で、大切な場所だと感じた。「奇跡の一本松」を 写真では見たことがあったが、海風を感じ、波の 音が聞こえ、震災後そのままの建物を背景にして 見る一本松は、写真では感じることのできないも のであった。「奇跡の一本松」は現在、モニュメン トとして保存されている。実際の松は、接ぎ木や 種子から苗を育てられており、復興のシンボルの 遺伝子を、いろいろなかたちで受け継いでいって



「奇跡の一本松」とその周りの様子

ほしいと感じた。

震災から約7年半経過したが、陸前高田市の復興の様子を見ると、まだまだ進んでいないと感じた。すれ違う車は、かさ上げのための土を運ぶダンプばかりであるし、かさ上げ地の約60%はまだ何に利用するのか決まっていないようである。この現状を受け、復興とはどういうことなのかを考えるきっかけとなった。街を取り戻すことなのか、生活を取り戻すことなのか、二度と同じような被害を生まないように語り継いでいくことなのか、改めて考えてみたい。



陸前高田市の様子

この陸前高田市の見学では、防災教育はもちろん、命があることや命を守ることの素晴らしさを 学ぶことができたと思う。教員として、子どもた ちの命を守ることができる教員になりたい。また、 現地の方と関わる中から、その人の立場になって 考えることや分からなくても分かろうとする努力、 寄り添う気持ちの大切さも学んだ。教員としてだ けではなく、一人の人間としてどうあるべきかを 感じることのできる良い研修であった。

【教職実践専攻 1年次 山口裕平】

# 大槌町語り部ガイド説明

大槌町では一般社団法人「おらが大槌夢広場」 の代表理事である神谷未生さんに語り部ガイドと して説明していただいた。「おらが大槌夢広場」で は、各校種の修学旅行や様々な団体の研修旅行の 団体の受け入れ、「おらが大槌復興食堂」をはじめ とする多くのプロジェクトの企画・運営を行って いる。大槌町のような被害の大きかった場所では、 こうした観光のように団体で来ることに反感をも つ人も少なくない。神谷さんたちは、そうした地 元の方々と外から学びに来る人々とを繋ぐ役割を している。代表的なものとして、団体できた人達 には必ず、黙祷をお願いしているという。犠牲者 やその遺族への思いを一人一人が考えてもらえる ようにという思いがこもっている。



10月20日の午前中、私たちは大船渡温泉を後にし、大槌町文化交流センターで神谷さんと合流した。大槌町文化交流センターは図書館も併設された木のぬくもりあふれるとてもあたたかい場所だった。入り口を入ってすぐの、エントランスホールには大槌町の模型が展示されていた。よく見ると、家のひとつひとつに透明なプラスチック板がついており、名字が書かれている。これは被災した町民から聞きとった震災直前の大槌町を厳密に再現された模型だった。

神谷さんはこの模型を使って、大槌町の地理的 条件という視点から東日本大震災の状況を説明し てくれた。まず大槌町はそのほとんどが山である。 沿岸部の少ない平地に人々は暮らしていた。平地には大槌川と小鎚川が、北上山地に発してほぼ並行に南東方向へ流れ、太平洋の大槌湾へと注いでいる。津波は大槌湾から襲ってくるだけではなく、大槌川・小槌川を遡上した。3方向からの津波から避難する必要があったのである。

これだけを聞くと、沿岸部に位置する大槌町に住んでいれば、地震から津波を予測し、逃げようと考えるだろう。しかし、3月11日の東日本大震災では死者行方不明者1,285名とたくさんの犠牲者がでてしまった。神谷さんはその理由として地震がおこった時間を挙げた。地震があった時間、家にいたのは高齢者が多かったのではないかと考えているのである。もし一緒に孫がいたら、きっと事態を軽く見なかっただろう、他に家族がいたら一緒に逃げただろう、という言葉にとても現実感があった。

実際、学校では子どもたちを安全な場所へ避難させたために、学校にいた子どもたちの中からは犠牲者はでていない。神谷さんの話と表情からは、「避難さえできていれば助かったかもしれないのに、なぜ」という悔やんでも悔やみきれない感情が読み取れた。「率先避難者たれ」という言葉は、昨年の研修旅行でも繰り返し聞いた言葉であった。大槌町での時間は今一度、その重要性と行動に移す難しさを教えてくれた。

【教職実践専攻 2年次 保坂迪菜】



### <当時の旧町役場の様子>

大槌町の中心地に旧町役場がある。震災当時、 役場で働いていた職員の人は、建物が崩壊しそう なほどの大きい地震に慌てて駐車場に避難した。 その場で災害対策本部を立ち上げた。災害対策本 部設置のためにテント、テーブル、椅子、マニュ アルを準備し、住民を避難誘導した。

震災当時は、ほとんどの人が役場に逃げ込もうとした。1階と2階の階段は、学校にあるような大きな階段で、駆け上がることができた。しかし、屋上までは梯子で上る必要があった。梯子の先にも階段があり、全員が屋上へ避難するのは困難だった。逃げ遅れた約40名の命が奪われた。約20名が屋上に上ることができ、助かった。波にのまれたところを屋上にいた人に引っ張ってもらい、助かった人もいた。それだけ津波は高かった。

火災も多く発生した。水産加工場が多く、オイルに火災が引火したり、プロパンガスが膨張し、5秒に1回くらい爆発したりした。360度目に映るものが燃えていた。町の大きさから予想される瓦礫の量が、予想よりはるかに少なかった。つまり、ほぼ瓦礫は火災により燃え尽くされていた。行方不明者は、被災地の中でも飛びぬけて多い。震災で約1300名の命が奪われ、約3分の1である約400名が未だに行方不明だ。当時の被害の大きさが分かる。

#### <旧大槌町役場の存在>

唯一被災した町で町長の命が奪われている。役 場職員の約3分の1が亡くなってしまったため、 組織で意思決定できる人が居らず、復興が遅れて しまった。

旧大槌町町役場は、当時の震災の傷跡を残していた。損傷が激しかった場所以外は残っていた。 旧町役場は、家族が生きた証が残った唯一の場所であり、心の支えになっている人がいる。一方で、役場を見るとパニックになり、精神的に辛く、苦しんでいる人がいる。旧町役場は、両者の 思いを受け止めていた。町の協議会において、7 対6のわずかな差で、解体派の意見が多かったが、現在も裁判所を通じて旧町役場を残すか否か、話し合っている途中である。解体派、賛成派の人も、どちらの気持ちもよく分かっていて、悩み、考えていることが分かった。大槌町は、正解

がない課題 にみんなで 立ち向かっ ている。



旧大槌町役場

#### <大槌町の現状>

役場から少し離れた高台にある城山公園にて、 高台から見た震災前の大槌町の写真と、現在の大 槌町の景色を見た。旧町役場の前に立って大槌町 を見るよりも、上から大槌町を見たほうが、空き 地が目立って見えた。現在は、当時の住民の4分 の1しか戻ってきていない。自力再建ができない 人のための災害公営住宅が建てられ、入居者の多 くが高齢者だという。地区全体が、5年そして1 0年後の自治体の維持に課題を抱えている。現在 は、安全を考慮し、住んではいけないと決められ た地区がある。以前はその地区に500世帯以上 の人が暮らしていた。未だに住む場所が決まら ず、仮設住宅暮らしを余儀なくされている人が町 内で約700名もいる状況である。重機やマン パワーが足りず、なかなか復興が思うように進ま ないことが心配された。

#### <避難の心得>

大槌町訪問時は、一般社団法人「おらが大槌夢 広場」 の代表理事である神谷未生さんに、語り 部ガイドとしてお話していただいた。神谷さんの 言葉で印象的だったのは、「リーダーたるもの率 先避難者なれ」という言葉だった。この言葉が大 槌町で大切にされている背景にある、エピソード を2つ紹介していただいた。

#### 聞こえなかったサイレン

震災当時、役場では、防災無線を鳴らそうとし たが、防災無線が何らかの理由で1秒しかなら ず、津波警報は遠くまで聞こえなかった。ほとん どの人が、「サイレンが鳴らない=大丈夫」と判 断した。携帯で津波警報も鳴ったが、予想された 津波の高さ3mから5mだった。震災当時、大槌 町の防潮堤の高さは、6.4mだった。家にいる 時、3月の冬に、迷わずに逃げることを判断でき た人が少なかった

避難訓練はサイレンがなり、放送がかかり、避 難するという流れが主流である。しかし、サイレ ンがならなかった場合、私たちはどのように、危 険を察知するのだろうか。サイレンは避難の合図 ではあるが、私たちはサイレンに頼らず、自分自 身で、状況を判断し行動する力を身に付ける必要 がある。私たちはどこかで、マスメディアで放送 される予想が事実であるような受け止め方をして しまっていないだろうか。予想は、あくまでも予 想である。予想をもとに判断をするのは自分自身 である。予報は、あくまでも判断材料の一つとし て捉えることが大切である。

### ・チリ地震の記憶

江岸寺という町内で一番大きい、先祖代々大切に されている寺がある。震災で寺の本堂は被災して しまった。震災当時、本堂に逃げ込んだ高齢者が 多かった。理由の一つとして、1960年のチリ 地震が挙げられた。大槌町は被害にあったが、本 堂まで津波は来なかった。本堂に避難した多くの 人は、当時の事実から、本堂に避難したと考えら れる。住職さんの避難誘導に従って、より高いと ころに避難しようとしても3月の足場の悪い中、 斜面を登るのは厳しかった。また、「ここまでは こないから大丈夫」という思い込みが悲しい結果 を招いてしまった。

たった一人、二人が「逃げない」と言ったこと から負の連鎖が生まれている。たった一人、「そ れでも私は逃げる」という人がいれば、ついて来 て、より安全な場所へ避難できた人がいたかもし れない。

### <教師、家族、地域の一員として>

神谷さんはお話の中で、「逃げるということは 覚悟だ」と述べていた。教師だからこそ、子ども たちには、「逃げるという覚悟」を見せたいと思 った。そのためにできることは、教師として避難 する列の最後を守ることだけではないと分かっ た。先頭をきるという責務の重要さを感じた。こ の「覚悟」を見せる姿勢を大切にしていきたい。 そして子どもたちには、「自分で自分の命を守 る」判断力と決意を身に付けてほしい。

研修が終わり、私は家族に「ただいま」と言っ た。また、温かいご飯を作って待っていてくれた ことに「ありがとう」と伝えた。忙しい日や、大 変なことがある時がるけれど「これからもよろし く」と話した。

神谷さんは、語り部ガイドが終わる前、私たち に「人が亡くなった事実は、少しずつ受け入れる ことができる。でも、あの時「ただいま」や「あ りがとう」を言っていたらよかったという後悔は ずっとついてまわる。」とお話していた。家族に こそ言わなければいけないことがあり、伝えられ る相手がいるのであれば、それはものすごく幸せ なことだと教えてもらった。お話に共感し、自然 と涙が出た。些細な言葉を伝えることを通して、 自分の幸せを見つめ返すことも大切だと思った。 「ただいま」と帰れることは、幸せなことなのだ

ということを忘れないでいたい。

# 【教職実践専攻 2年次 若松彩花】

当時の大槌町の様子

現在の大槌町 の様子

# 大槌町での昼食



さんすりほ



磯丼



カキフライ定食



蓬莱島 (ひょっこりひょうたん島のモデル) https://iwatetabi.jp/spot/detail/03461/463.html



ウニセット



吉里吉里海岸

(「吉里吉里」とは砂浜を歩くと「キリキリ」と鳴る「鳴き砂」のアイヌ語から来ているといわれています。)

 $\frac{\texttt{https://iwatetabi.jp/spot/detail.spn.php?spot\_id=15}}{44}$ 

# 大槌町の様子

3日目は大槌町の見学にガイドの方の案内の下、訪れた。大槌町は今回初めて訪れたのだが、実際に被災した建物や大槌町の町並みを見てみて、改めて震災がもたらした被害や復興に向けた人々の様子を実感することができた。



の山や川、海などの地図といった大槌町に関する 資料が数多く展示されていた。おしゃっちの建物 自体も新しく、他のご利用されている方も数多く 来ていて賑わっていた。私自身もおしゃっちを訪 れ、様々な資料を見学したり、ガイドの方の説明 を伺ったりすることで、大槌町の地理的特色や震 災時の様子などを数多く学ばせていただくことが できた。



実際に、見学させていただいた中で、特に印象深かったのは、大槌町の復元模型と地図についてである。まず大槌町の復元模型についてだが、この大槌町の復元模型は、神戸大学により復元された。復元模型を見てみると、当時の町並みや山の



位置、川の経路などが詳細に復元されていることが分かった。また、東日本大震災により甚大な被害を被った旧大槌町役場庁舎や江岸寺の場所も記されていた。このような当時の町の状況を忠実に再現した復元模型によって、震災前の思い出や出来事を知ることができた。

また、復元模型より、大槌町の地理的な位置として、周りが海と2つの川に囲まれていることが分かった。そのため、海と2つの川の3方向から津波が押し寄せてくるため、震災時は海と2つの川の三方攻めに遭っていたことが分かった。その津波から逃げる必要があるのだが、避難場所としての山の位置は、川を挟んだ向かい側と、海と正反対のところしかなく、逃げるには距離が遠いところに山があるのも大槌町の地理的な特色であることが分かった。そのため、できる限り早く津波の情報をつかみ、早めに山へ避難していくことが、津波から自分の身を守るために重要であるということを学ぶことができた。

大槌町を見学してみて、復興は進んでいるが、 いまだ震災の傷跡が残っているということを改め て痛感した。今回大槌町で学んだことを、今後の 防災教育や災害への対策に生かしていく所存であ る。

【教職実践専攻 2年次 竹内恭平】

「大槌町文化交流センター おしゃち」において、震災当時の大槌町の様子や地形について学んだ後に、実際に被災した建物や住民が避難した場所を見て回った。

はじめに、「大槌町文化交流センター おしゃち」から徒歩5分程の場所にある旧大槌町役場を見学した。多くの建物が今となっては残っていないが旧大槌町役場は被災した当時のまま残されていた。コンクリートの側面がだいぶ傷んでいて、ひびが入っていたり、崩れている部分もあり、内部までは見ることができなかったが当時の津波の恐ろしさが随所から感じられる状態だった。そんな光景を見て、自分がその場にいたら生き延びるための適切な判断ができていたのだろうかと考えさせられた。



次に私たちは、大槌町の人たちが避難した城山 公園を訪れた。バスでこそ数分程の移動時間だっ たが、車を持っていない人はそこまで避難するの にある程度の時間がかかってしまうことが想像で きる。ましてや震災が起きた3月のはじめは気温 も低いし、雪が積もっていたかもしれない。そん ななかこの小高い公園まで自宅から短時間で避難 してくることは至難の業だったと思う。その城山 公園からは、大槌町が一望することができた。先 ほど訪れた「大槌町文化交流センター おしゃち」 や旧大槌町役場、震災後に建てられたと思われる 家々、復興の工事の風景など、復興に向けて前進 している現在の大槌町の様子がよく伝わってきた。 また、公園内には東日本大震災津波による物故者の納骨堂や、被災地の方々とボランティアで協力して建立した「希望の灯り」があり、今後もこの地を訪れた人たちは、震災で犠牲になった人たちのことを想ったり、震災から学んだ教訓をもとに、二度とこのような被害を繰り返さないようにと心に刻んだりすることができるのだろうと思った。

今回大槌町を見てまわることができてとても貴 重な経験をさせてもらった。大槌町で見たこと、





感他と自域ら災たに常きた年に人ら分に、しらすにた。度た事えの起自てどる考いさかことず住こ分しののえとにらかとしにむっがまよかて思、教をて、地た被っうをおっ来員

になる身として、教員という立場からどのような ことができるのか、学校として何ができるのかに ついてもしっかりと考えておきたい。この経験を 自分の今後に生かしていきたいと思う。

【教職実践専攻 2年次 佐藤貴大】

# やまゆり温泉報告

東成瀬小中での授業参観、見学を終え、研修旅 行1日目は「やまゆり温泉」に宿泊しました。や まゆり温程泉に着いて、各自の部屋で一息つき、 夕食会場である大広間に集合。廣嶋徹特別教授の 乾杯のご発声でお待ちかねの1日目の夕食の時間 がスタートしました。座席には、大学教員、現職 院生、学部卒院生が自由に座り、話に花を咲かせ ながらおいしい夕食を頂きました。夕食の時間も 後半になってくると、席を移動してあちこちで大 盛り上がり。普段の生活のことや、研究や実習の 話題、趣味の話題など様々な話に花が咲いていま した。大学教員、現職院生、学部卒院生が垣根な くいろいろなグループができて盛り上がることが できることは秋田大学教職大学院のいいところで あると思います。宴もたけなわとなり、マネジメ ントコースの現職院生、猿田先生の締めのあいさ つで夕食の時間はお開きとなりましたが、時間が 許す限り大広間で話し込む姿も見られました。

やまかり温泉 ホテルブラン ALA解 おもでなしの宿 はおれり休私院に冷で体し釜夕、風を、んは生山た冷をたの食各呂癒部だ、と間いえ暖。ごの々でし屋り他一部空ため同飯後、疲たで。の緒の気身まじを

食べて、裸のつきあいをすることで院生同士の距離がこれまでよりもぐっと縮まったような気がします。夕食やお風呂が済んで、しばらくするとい

くつかの部屋に人が集まりだしました。教育談義 や趣味の話、お悩み相談など様々な話に花を咲か せながら夜は更けていきました。

翌日は、みんな疲れもなくすっきりした様子で 朝ご飯を食べて、やまゆり温泉を出発。栗駒山の きれいな紅葉を眺めながら陸前高田へ向かいまし た。

# 【教職実践専攻 2年次 木村陽平】



⇒ 冬の様子



# 大船渡温泉報告

私たちは、岩手研修・研究旅行の二日目(10月19日)に大船渡温泉を訪れ、一泊した。大船渡温泉は海岸沿いに位置しており、客室や温泉からは三陸湾を一望することができた。



について意見交換・交流をした。夕食には、大船渡温泉名物の3日間煮込んだマグロのカマも出していただき、インパクトのある大きさとよく染みこんだ味を楽しむことができた。同じ院生室で過ごす現職院生と学部卒院生は普段から交流している



が、他の院生室で過ごす現職院生や学部卒院生と は交流する時間が少なくなってしまいがちである。 また、2年次の学部卒院生は1年次の院生と同じ 講義を受講する機会が少なくなっている。今回の ような研修は違う院生室で過ごす人や学年が違う 院生とより関係を深めるよい機会だった。今回の 研修をきっかけにより深い学びをすることができ るようにしていきたい。

## 【教職実践専攻 2年次 保達諒平】







# 院生の振り返り

#### 現職院生

- ・被災された方々には、一人一人違った体験や思 いがある。それに寄り添って理解すること、そ して、自分は何ができるかを考え、実行してい くことが復興を推し進めることにつながると感 じた。また、学校での防災教育に震災の教訓を 生かすことも我々の使命であると思われる。地 域と合同で避難訓練を実施したり、自分の命を、 最善を尽くして守ることを指導したりして、子 ども・保護者・地域の方々の防災に対する意識 を高めていくことができればと考える。小学校 では、もうすでに震災を体験していない子ども たちが入学してきていて、これからどんどん増 えていくことになる。そんな子どもたちにも私 たちが責任をもって語り継ぎ、危機意識をもっ て防災教育を行うことが未来の命を守ることに つながると思われる。
- ・先の見えない社会を向かえ、正解のない問いに 対する考え方、行動が求められる中、キャリア 教育と震災の教訓の継承が研修旅行を貫くテー マだったと思う。東成瀬村の探求型学習や小学 校での作文から中学校でのポスターへの学びの つながり、高田小の防災教育の取り組みをささ える心のケアへの想い、陸前高田市の一本杉と 大槌町の旧役場調査保存、陸前高田市の街機能 の大移転、大槌町での被災場所での街再建、と 関わる人間全てにとって、自分の人生を考える 必然性があるものだった。車中からみた釜石市 の復興の具合を含め、自分にとって大変学びの 多い研修旅行だった。
- ・地震大国である日本において、常に災害が起き ることを想定して生活していかなければならな いことを今回の研修で学ぶことができた。台風 や大雨などの異常気象や学校付近や通学路への 熊の出没など普段の生活においても予期しない 被害が報告されている。自然の中でどのような

- 危険があるのか予測し、その状況において最適 な方法や手段を考え実行することが重要である ということを今回の被災地訪問で深く学ぶこと ができた。改めて危機意識を常にもつことが防 災対策の基本であることを実感することができ た。
- ・事前にDVDで見た中学生のように私たちは率 先して行動していかなければならないし、率先 して行動できる生徒に育てていかなければなら ないと感じた。そのためには正しい判断ができ ることが必要であり、それは防災だけでなく、 生きていくうえで必要なことだと思う。被災地 を訪問して強く感じたのは、想定内のことだけ を考えていくのではいけないということだ。こ れからは想定外のことも考え、判断するために は知識も必要になるし、マニュアル通りの訓練 だけでなく、状況判断の求められる訓練も必要 になると思う。「自分で自分の命を守る」大切さ を感じた研修だった。
- ・私は、2011年から3年間、中学校の職員として、 生徒たちとともに被災地支援学習に取り組みま した。その当時は物資等の支援が主だったので すが、震災から7年を過ぎた今、「支援」から「被 災からの学び」と学習のシフトが変わりつつあ るのではないかと感じています。語り部さんか らのお話を通して、一人一人が震災から得た教 訓を受け止め、その教訓を自分の人生に反映さ せていくことが大切なのだなと思いました。災 害、事故等の予想できない突発的な出来事は、 まず間違いなく起こることでしょう。そのとき に自他の命を守る行動が即座にとれるのかが問 われているのだと思います。とてもいい勉強に なりました。
- ・東成瀬、陸前高田、大槌の研修を通して考えさ せられたことは、想定を超える様々な災害に対

して学校は児童生徒の安全・安心を守りながら、 どのような教育や支援ができるかである。様々 な視点で事前準備したものを生かしながらその 時の災害の状況に合わせて柔軟に対応すること と起きた後の立て直しや子ども達の心のケアを 丁寧に行うことが大切である。学校は、どこよ りも安心・安全な場所であり、一人一人が楽し い居場所でなくてはならない。この研修を通し て、学校現場の根底になければいけないものに ついて考えることができた。 ・本研修では、東成瀬小、中学校と東日本大震災 の被災地を見学した。東成瀬では、子ども達の 高い学力と学習意欲を支える学習環境や村ぐる みでの組織運営について、被災地では、復興の 現状とそこに暮らす子ども達の学校での日常に ついて、実際に現場に足を運び、この目で見て 体感することができたことが何よりも大きな意 味があると感じた。この経験を教員として、ま た、一個人としてこれからの生活に生かしてい きたい。



東成瀬村立東成瀬中学校





陸前高田市立高田小学校



# 学卒院生

- ・今回訪問した陸前高田小や大槌町の学校は、先生方の対応により、生徒の命が守られた一方で、保護者に引き渡したことにより失われた命もあるということでした。どのような判断が最もふさわしく、生徒の安全につながるかという判断は、とても難しいものであると思います。特に学校という場は、地域にとって何かあれば避難する場所であり、人手も多くあるような、絶対的安心がある場として認識されているのではないかと思われます。学校が、本当に安全が確保された場なのか、それを判断できるのはその学校をよく理解している教師にしかできないことだと思います。災害時に率先して多くの命を守る役割が教師にはあるのだと実感させられました。
- ・東成瀬小・中の視察では、秋田県で重点となっているふるさと教育や秋田の探究型授業が体現されていた。講話や授業の中で教師の「わざ」を多く見つけたので、自分なりに整理したい。教育長の講話は、「どんな子どもの姿があればよいか」という核に関することで、これから教職に就くにあたって大切なことだと考えたので、心に留めておきたい。被災地視察に関して、被災した子どもたちが置かれている状況と、それに真剣に取り組む教員の姿がリアルに感じられた。当事者の思いをひとりの人間として子ども立ちに伝えていくことが防災意識を高めることに繋がると感じた。
- ・1 日目の東成瀬小・中の教育ではあますことなく 学校の壁や地元の資源を活用していました。し かしながら現状に満足せずに常により良くを目 指していました。2・3日目の被災地訪問では 悲惨な災害時の状況と現状を見聞きしました。 そのうえで防災に対する意識や準備をしておく 必要があると感じました。この研修旅行で教育 に対する意識や防災に対する意識が変わりまし た。これをどうやって生かしていくかについて

- 考えていきたいです。
- ・被災地の状況は私が想像していたものとは大き く異なっていた。陸前高田では、瓦礫の撤去が 終わり、かさ上げの工事が行われていた。その ため、民家はほとんど見られなかった。高田小 学校にも、まだまだ爪痕が残っていた。学習発 表会の練習で行われたいた「スイミー」が今ま でとは全く違うものに見えた。「命を守る」教育 について深く考えることのできた2日間であっ た。
- ・今回、たくさんの場所に行って一番感じたことは、「子どもたちに何を伝えていけばいいのだろうか」ということです。命の大切さ、いざという時にどう行動すればいいのか…たくさん伝えることがあり、どれも生きる上で必要なことだと考えています。現場に出たときは、様々なことから伝えていきたいです。初めての被災地への訪問は胸が苦しくなることばかりでした。テレビ越しでしか知らない出来事が、目の目で起こっていたらと考えるとつらい気持ちになります。一人一人が前を向いて進んでいる姿に心を打たれました。
- ・この研修では、大槌町の語り部ガイドさんの「リーダーこそ率先の避難者であれ」や「自分を助けることが、人を助けることにつながる」という言葉が印象に残った。同時に、命があることや人の命を助けることがいかに素晴らしいことがあるか、ということを感じることができた。被災地を訪問した一人として、生徒たちにも伝えていきたいし、学校現場では命を守る避難訓練を実践できるようにしたいところがあると思う。しかし、それを分かろうことの震災は、経験した者でしか分からないところがあると思う。しかし、それを分かろうことはできるととやその人の気持ちに寄り添うことはできると思う。生徒たちの悩みや不安もさまざまである。安心・安全な学校や教室をつくっていける

教員になりたい。

- ・東成瀬村の教育は村全体のバックアップのもとに行われている。東成瀬村の実践を他の市町村でも同じように取り入れることができるかと言われると、そう簡単にはいかないだろうが、自学ノートの取り組みなど、少しずつ取り入れて、普及させることができればと思う、被災地見学に関しては、個人的に何度か足を運んでいるため、以前の状況と現在との比較をすることができた。確かに現在も地面がむき出しのところが多いが、着実に建物が建てられたり、地面が舗装されたりして、町が再びつくられつつある。また、被災地のことを考えるとき、どうしても被害の方に目が向けられがちではあるが、復興の取り組みと、その現実的な課題についてもよく考えておきたいと思う。防災は教育活動にお
- いて重要な役割を果たすため、今回の被災地訪問はそのことを深く考える機会となった。この経験をいかして、将来は学校のミドルリーダーとしての役割を果たすことができればと思う。
- ・まず、被災の状況と体験した人々の心情を把握することが大切である。その上で、今後地域や社会を発展させる人材の育成のために、果たすべき役割を考えていく必要があると感じた。また、これらを考える際に、物事が起こる原因を挙げてそれらがどのように関連しているかを捉えて、効果的な実践につなげていくべきだとも実感できた。今回は特に、「命の大切さ」と「自然と人とのつながり」について改めて知ることができたので、現場ではこれらを実感が伴う形で生徒に伝えて考えさせていきたい。













#### 復興への変遷コース

の復興状況を様々な角度から、かさ上けくりの様子、産業などの変遷をわかりやす

#### 震災遺構巡りコース

#### 観光地巡りコース

告門寺(親子地蔵・五百羅漢など)、箱根山展望台、気仙 大工左官伝承館、玉山金山、松苗畑等、市内の観光地 をご案内いたします。



- \*お客様にお車で用意いたさます。 自原用車、バス、レソタカー、タクター等をご用意(だ コペ、ガイドが原しご案内いたします。 ガイドの乗降場所が異しな場合は、移動予段が別途か ・労がトの乗降場所が異なる場合は、移動予段が別途か ・労励の一本的は、高台からのご歌行いかにます。 詳しくは、お電話、ファックス、E-mailにてお問合せ下さい。



■ 陸前高田市観光物産協会内「陸前高田観光ガイド部会」 岩手県陸前高田市高田町字鳴石42-5

TEL/FAX **O 1 9 2-5 4-5 O 1 1**E-mail: rikutaka-kankou@crest.ocn.ne.jp
H P: https://takanavi.org



新沼岳志

本当に怖かった。絶望のどん底にいた。 

支えになってほしい…勇気づけてほしい…高田の応援団として。 我々語り部は震災の恐怖と教訓、復興の

状況、そして何よりも皆様方に御礼を続け てゆかねば。 命の思人だもの。

これからも笑顔の種、勇気の種、元気の 種等々色々な種類の花の種、心の苗もよ ろしくお願い申し上げます。



實吉義正

もの語る 津波石の礎を!



河野正義

陸

こうのままは、
あの大津波で生ま残ったのに人のため
に何もしていない、何か出来ることがない
かと思っていたとき、このガイドの仕事に
が全に、からなかったご両月すること
となりました。これおときくの方々からを
等せて下るり、多を進んでくださらは
は本書にありがい事です。
これまで、自分のカイオかな様様を含め、大力な雑況と少しずつ違じ程期の様子を
ご問月してきした、お客様のおりかと自問して
かります。
大津波の被害や検問は、今後も一番大
切ります。水油できているのだろうかと自問して
かります。
大津波の被害や検問は、今後も一番大
助さるこれが、自然やかいしい食べ
物や機能やの部分や機能変化とと、機筋高
自の勢力からしてからまずが出ることが、ため、と Ш



高

観

光 ガ 1

## 菅野コハル

紺野文彰

: です。 豊かな歴史と文化、豊かな海がある気仙 : 棚点 膝前高田を呈非訪れてください。



人々の生き方が変わった あたりまえと観でいた景色が変わった あたりまえと観でいた景色が変わった だからこそしっかり生きなければ多い。 多くの人達との出会いがありました。 こまでこれからな金回の音楽をした。 こまでよれる中心を全面のも金回の音があたと



佐々木武雄

忘れもしない。あの日、あの時。 東日本大震災から過ごしてきた日々。

震災復興が進むとともに、私達には様々 な課題が見え、感じてきております。 災害でのものを伝えることに加え、私達 が10年、100年先まで伝えたいことを、話 り部として活動していく事が、重要だと思

#### ←https://takanavi.org/wp-

content/uploads/2015/06/H30.3%E3%82%AC%E3%82%A4%E3%83%89%E

3%83%91%E3%83%B3%E3%83%95%E7%B5%90%E5%90%88.pdf

# ★槌復興ツーリズム事業

#### 「人は、人でしか変わらない」

津波が来て、町の様子は一変しました。でも、私たち町民を変化させ成長させたのは、 沢山の支援に来てくれた**人との交**流です。

- 知識がない
- ・新しいことに挑戦しない

3拍子そろった町民が、外部の人と交流で自信を持ちはじめ、様々な知識を身につけ、 少しづつ新しい事に挑戦しよう!という気風に変わり始めています。

#### 「支援」ではなく、バートナーに。

した。 大槌人が抱えている課題は、皆さん自身の内面にある課題ではないですか?大槌人が、その課題にどう向き合い、乗り越えようとしているのか話し合い、感じて下さい。そして、それを自分をも成長させる「きっかけ」にして下さい。そんな、町民と町外の人が 対等な関係をきづくためのツーリズム事業を行っています。



#### <新人研修·企業研修>



現地の人々とふれあい、個人と社会の 関わり方、働く事の意味を考え、仲間 との共同作業を通してチームワークカ を聞きます。 フークショップ

- <リーダーシップ研修>



研修》 町の将来、住む所、子供の教育。全て において先行き不透明な状況の中、ど のように「人間」「父親」「母親」、 そして「可民」として受情を決めて いったのか、住民の方々の話を聞き、 新たなる挑戦へ挑む勇気をもらってく ださい。

さらに、震災を経験したからこそ見え て来た、リーダーに必要な「覚悟」 「プライド」「行動力」「人間愛」と いった素質や思いの必要性を、町民と の会話や視察を通して感じとります。

- a 被災時に町民のリーダー的役割を 果たした方のお話
- 。 被災後、覚悟を決め起業した方 との交流 a 新規事業の立ち上げ現場視察
- ロ 町民をまじえたワークショップ

## <教育型ツアー>



学生やユース世代に、「何があっても生きのびる」事、未来に対する不安を感じる時でも「覚悟」を決めて前へ進む事の大切をを伝えます。 震災ナレッジの趣承として、防災、避難、 労働所運営等の観点からの学びも取り込みます。

- □ 町内語り部ガイド □ 被災当時の話 □ 避難所生活と若者が果たした役 割について 復興と社会的事業の関わり方に ついての視察 ロークショップ

# <被災地視察>



「被災地で何をしていいのかわからない。」そんな本音を語って頂き、まずは 町民の方々と触れ合い、現地の情報収集 をしながら、各々のスタイルにあった被 災地との関わり方を探っていきます。

- □ 町内語り部ガイド □ 町民との交流 □ 町内ボランティア活動 □ ワークショップ

http://www.oraga-otsuchi.jp/project/tourism/



「カフェフードバーわい わい」にて(誰が入れ替わっているでしょうか?)



# <事後学習>

O1月11日(金)12:50~14:20

「学校危機管理の現状と課題」の14回目(1月11日)、15回目(2月1日)の授業の中に組み込んで実施した。

12月14日に、以下の課題を提示した。

チーム単位で、各人が以下のテーマに取り組む。

- ①事前対応:防災・安全教育(起こらないようにする、又は起こっても深刻なものにならないようにする)
- ②緊急時対応:災害発生時、避難所(深刻なものが起こったときに、どう対応するか)
- ③事後対応:心のケア、学習支援など
- ④復旧対応:復興の地域づくりプラン作成、安全安心な学校づくりプラン等
- ①②は指導が災害等の発生前に行われると想定する。
- ③④は指導が災害等の発生後に行われると想定する。

各チームの現職院生は教職員向け校内研修プログラム(指導案)を考える。

自分の校種、勤務校を想定する。

各チームの学卒院生は児童生徒向け授業・訓練プログラム(指導案)を考える。

自分の実習校、校種、教科等、学年等を想定する。

現職、学卒ともに授業の指導案の形式にならったものを作成する。

災害の内容の想定は各人に任せる(危険動物でも自然災害でも交通事故でもいじめでも体罰でもなんでもよいが、比較的深刻度の大きな事故・事件を想定する)

1月11日は、チーム毎に各人持ち寄った指導案を発表し合い、検討を行った。その上で、チーム毎に優れていると思われる現職院生の指導案を一つ、学卒院生の指導案を一つ、合計二つを選んでもらった。その後、選んだ理由とともに指導案の概略を、各チームから発表してもらい、教員側から感想も含めて、検討してほしい点を提示した。そのことを踏まえ、残りの時間、選んだ指導案についてブラッシュアップするようにチームで検討してもらった。

2月1日までに、その指導案さらに改良し、プレゼン用のパワーポイントを作成するように指示した。

○2月1日(金) 12:50~14:20以下の流れで進めた。

①各チームから報告二つと質疑 現職院生発表 5 分+学卒院生発表 5 分+質疑応答 5 分、計 1 5 分 4 チームあるため、総計 6 0 分

②東成瀬・陸前高田・大槌研修旅行の概要の発表 M2学卒院生3名が担当、20分 発表に用いた資料等を、当日出た意見等を元に修正し、提出してもらい、報告書としてまとめることにした。

なお、当日は、研修プログラム開発支援事業運営・評価委員会が開催された。

参加者:秋田県教育庁総務課政策企画・広報班副主幹 大山 厚

秋田県総合教育センター副所長 坂本 寿孝

秋田市教育委員会学校教育課課長補佐 長谷山 庫之

秋田大学大学院教育学研究科長 佐藤 修司

教職実践専攻長・附属教育実践研究支援センター長 佐藤 学

附属教育実践研究支援センター副センター長 田仲 誠佑

日程は以下のようになっており、参加者が院生の発表の様子を参観した。

- 13:30 授業視察開始(学校危機管理の現状と課題)
- 14:20 授業視察終了、休憩・移動
- 14:30 研修プログラム開発支援事業の取組と評価資料(説明)〔佐藤学〕
- 14:45 意見交換
- 15:40 終了

# 防災研修会実施計画

現職院生 齊藤 徹

1 研修場所 秋田県立聴覚支援学校会議室

**2 参加者** 全職員

# 3 研修テーマ 「大地震による避難時の幼児児童生徒及び職員の安全確保と保護者 との連絡方法のありかた」

※本校教職員に対し、災害時の対応で疑問に思っている点や課題であると感じている点について自由記述によるアンケートを行い、その結果に基づいて研修内容を決定した。

#### 4 研修のねらい

- ・災害発生時の避難経路の安全性を確認し、危険個所、危険要因等について理解する。
- ・災害発生時の保護者への状況に応じた連絡方法について検討し、課題点と解決方法 について検討する。
- ・教職員の危機管理意識の向上を図る。

# 5 研修の流れ

時間	研修内容	留意点
5分	1 研修テーマとねらいの確認	・東日本大震災の状況を交えながら、幼児 児童生徒や職員自身の身を守るために行う ことを伝える。
5分	2 説明 ・校内の避難経路 2グループ ・学校周辺の安全 2グループ ・保護者との連絡方法 2グループ	<ul> <li>・班別に行うことを伝える。</li> <li>①自分のグループの内容について課題と解決方法を考える。</li> <li>②携帯用ホワイトボードにキーワードでまとめる。</li> <li>③グループごとに発表。付箋紙記入。</li> <li>④ホワイトボードに付箋紙をはり、見合う。</li> </ul>
25分	<ul><li>3 ワークショップを行う。</li><li>・課題</li><li>・解決方法</li></ul>	・校内 G は実際に避難経路を確認してから校舎配置図を使って話し合う。  ○棚の上○天井○廊下○非常口の開閉 ○教室の扉○窓ガラス○吊り下げテレビ ・学校周辺 G は、航空写真を元に話し合う。 ○外壁○崖○坂○歩道の無い道路 ○交差点○堰 ・連絡方法 G は、東日本大震災の状況を1 名に話していただき、課題や解決方法につ

			いて検討する。 ○ TV ○電話○インターネット○メール ○学校待機○両親の迎え ・グループごとに課題と解決方法について 携帯用のホワイトボードにまとめる。
20分	4	グループの発表	・発表を聞きながら、感想、他の解決方法、 新たな課題について色別の付箋紙に書きな がら発表を聞く。
7分		ホワイトボードに付箋紙をは 見合う。	<ul><li>・似ている内容は、近くにはるよう伝える。</li><li>・周囲の人と話しながら、自由に見てもよいことを伝える。</li></ul>
3分	6	アンケート用紙に記入する。	・防災研修会について振り返る。
5分	7	防災担当からのまとめ	・各グループからの報告と付箋をもとに、 今後の研修計画や防災マニュアルの改善に ついて検討していくことを伝える。

は予想されるキーワードで、配布用には記載しない。

# 6 本研修に期待すること

- ・教職員が避難経路の安全性を常に考えて行動できる(掲示物、落下物、破損、降雪等)。
- ・今後の防災教育につなげるため、幼児児童生徒の下校時に災害が発生した際の危険性 について考える機会とし、今後の防災教育につなげる。
- ・保護者との連絡方法、安否確認等、電話、メールが使用できない際の対応について理解を深めるとともに、マニュアルの改善につなげる。

# 防災研修会実施計画

~秋田県立聴覚支援学校での取り組みを想定して~

発達教育・特別支援教育コース 2518503 齊藤 徹





# 研修テーマ

幼児児童生徒数

教職員数

# 「大地震による避難時の幼児児童生徒及び 職員の安全確保と保護者との連携」

秋田県立聴覚支援学校の概要

隣に療育センター、近隣は住宅地

30名

6 2 名

秋田市上北手 秋田赤十字病院の向かいのかがやきの丘(南が丘)

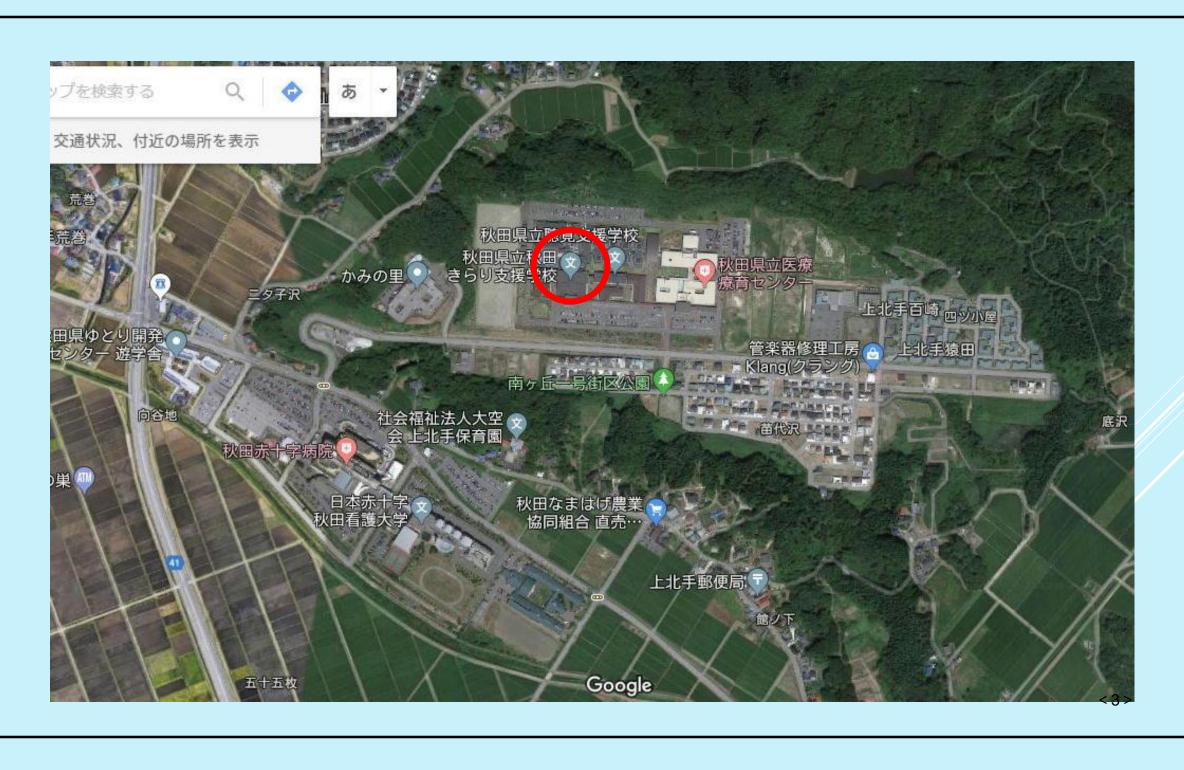
聴覚支援学校、視覚支援学校、きらり支援学校が同じ校舎

(幼稚部から高等部専攻科まで)

(寄宿舎指導員、非常勤職員を含む)

※本校教職員に対し、災害時の対応で疑問に思っている点や課題であると感じている点につ いて自由記述によるアンケートを行い、その結果に基づいて研修内容を決定した。

< 4 >



# 研修のねらい

- ①災害発生時の避難経路の安全性を確認し、危険箇所、危険要因等 について理解する。
- ②災害発生時の保護者への状況に応じた連絡方法について検討し、 課題点と解決方法について検討する。
- ③教職員の危機管理意識の向上を図る。

# 研修の流れ

- 研修テーマとねらいの確認
- 説明
- ワークショップ
- 4 グループごとの発表
- 5 ホワイトボードに付箋紙をはる
- 6 アンケート用紙に記入
- 防災担当からのまとめ

<2>

< 5 >

# 3 ワークショップ

①校内の避難経路2グループ②学校周辺の安全2グループ③保護者との連絡方法2グループ

①の2グループ

実際に避難経路を確認してから、校舎配置図を使って話し合う。

○棚の上 ○天井 ○廊下 ○非常口の開閉 ○教室の扉

○窓ガラス ○吊り下げテレビ

②の2グループ

航空写真を元に話し合う。

○外壁 ○崖 ○坂 ○歩道の無い道路

③の2グループ

東日本大震災の状況を1名に話していただき、課題や解決方法について検討する。

○電話 ○インターネット ○メール ○学校待機 ○両親の迎え



<7>

# 本研修に期待すること



- ○教職員が避難経路の安全性を常に考えて行動できる(掲示物、落下物、 破損、降雪等)。
- ○幼児児童生徒の下校時に災害が発生した際の危険性について考える機会と し、今後の防災教育につなげる。
- ○保護者との連絡方法、安否確認等、電話やメールが使用できない際の対応について理解を深めるとともに、マニュアルの改善につなげる。

<9>

# 5 ホワイトボードに付箋紙を貼る

- ○各グループの発表を聞きながら、付箋紙に<u>感想、他の解決方法、</u> 新たな課題、を色別の付箋紙に書きながら発表を聞く。
- ○発表が終わった後に、ホワイトボードの周りに付箋紙をはる時間を設ける。
- ○付箋紙をはり終えたら、全員で自由に見合う。

< 8 >

#### 秋田大学教育文化学部附属小学校 総合的な学習の時間 学習指導案

授業者 学卒院生 渡辺雄介

#### 1. 単元名 防災キャンプをしよう!

#### 2. 単元の目標

- (1) 学校周辺の地域について、自然災害等の現状を知り、それぞれの災害に対応した避難行動を取ることができる。
- (2) 災害に対して、自らの安全を確保するための日常的な備えができるようにする。
- (3) 安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、今後の生活に生かすことができる。

#### 3. 単元設定の理由

#### (1) 児童観

児童は、秋田市内各地から登校しており、地域の一員としての自覚が薄い傾向にある。防災教育を通じて、地域に対する理解を深めるとともに、地域の一員として安全で安心な社会づくりに参画する態度を育てたい。

学習に対しては、どの教科の授業でも同じように意欲的に取り組むことができる。授業内のグループ活動においては、積極的に自分の意見を発信し、仲間と協力して学びを深めることができる。一方で、学んだことを実生活に生かすということには課題が見られる。今回の単元で取り扱う災害に関する知識は、これから生きていく上でとても大切なものである。災害にあった際に適切な判断をし、安全のための行動を取ることができるようにしたい。

#### (2) 単元観

学校の位置する保戸野地区は、町中に位置しており、地震による建物の倒壊や、大規模な火災の発生などが想定される。非常時には瞬時に適切な対応を取ることが求められるため、必要な技術や知識を習得する体験活動の場が必要である。他地区では、東日本大震災発生時に多くの被災者が長期間、避難所での共同生活を送る事態となった。このことを踏まえ、児童には、防災教育として、避難所体験、野外炊飯などの非常時の生活を想定した体験を行うことが必要である。今年度は、全校で防災キャンプを実施し、災害が起こった場合の避難方法や、救急救命の学習、避難所での実際の暮らしを体験すること、また過去の災害について講話から学ぶことにより、災害への理解を深めるとともに備えができるようにしたい。

#### (3) 指導観

本単元は、日本赤十字社、秋田市防災安全対策課、秋田消防署、消防団、各町内会、婦人会等の協力の下、地域住民の参画を得て実施する。児童が、防災キャンプを通じた地域の方々との触れ合いの中で、「地域で生きる」ことを学び、地域の一員としての自覚をもつようにする。また、学んだ内容を今後の生活の中で生かすことのできるよう、児童は防災キャンプの事後に成果をまとめ、自分の防災ブックを作る活動を行う。

防災キャンプにおける具体的な取り組みとして、以下を想定している。

○防災訓練

避難訓練、AED による心肺蘇生・三角巾による応急処置実習

○宿泊体験 ※希望者のみ 段ボールによる寝床づくり、非常食体験、児童の引き渡し訓練

○講話

秋田大学 林信太郎 先生 岩手県大船渡市立末崎小学校 校長 熊谷拓郎 氏

#### 4. 全体計画 (13 時間)

主な学習活動・内容	目標	時数
○学校周辺の地域の自然災害の現状を知り、防	・学校周辺の地域の自然災害の現状を理解す	1
災キャンプへの必要感もつ。	ることができる。(知識・技能)	
○防災キャンプを行う。	・様々な災害に対応した避難行動がとれるよ	10
・災害安全に対する実践力を身につける。	うになる。(知識・技能)	
・秋田大学附属小学校が避難所となった場合	・災害に対して、自らの身を守るための日常的	本時
の、避難の仕方や災害時の避難所での過ごし	な備えをすることができる。(思考力・判断	
方を体験する。	カ)	
○学んだ成果をまとめ、自分のための防災ブッ	・安全で安心な社会づくりの重要性を認識し	2
クを作成する。	て、今後の生活に生かすことができる。	

#### 5. 本時の実際 (2~11/13)

<ol> <li>4時の美原</li> </ol>	(2,~11/ 13)	
日時	学習活動	教師の支援
【1日目】 13:30	<ul><li>○避難訓練(地震想定)</li><li>・校内から校庭に避難する。</li></ul>	・児童が落ち着いて避難行動をとること ができるように、校内放送を聞くよう声 掛けをする。
13:40	○開所式	<ul><li>体調の悪い児童がいないかどうか確認する。</li></ul>
14:00	○防災学習 I 「消防団の活動」	・児童から質問が出た際に、指名や質疑の進行を行う。
14:30	○防災学習 II ・救急救命講座 AED の使い方 ・三角巾による固定・止血	・AED や三角巾を上手く扱えない児童に対しの個別に指導を行う。 ・必要な道具の用意や、各団体との連携を行う。
16:00	○段ボールハウス設営 ○炊き出し訓練	・段ボールハウスの設置や炊き出しの用 意を速やかに行うことができるよう、手 順についての指示を出す。
17:30 18:30	<ul><li>○夕食</li><li>○片付け</li></ul>	・体調を崩す児童がいた場合に速やかに 対応する。
19:00	<ul><li>○防災学習Ⅲ</li><li>・被災地からの報告</li><li>岩手県大船渡市立末崎小学校</li><li>校長 熊谷拓郎 氏</li></ul>	<ul><li>・児童が、話を自分事として聞くことのできるよう、声掛けをする。</li></ul>
	○宿泊をしない児童は帰宅する。	・確実に帰宅することができるよう、保護 者への引き渡しを入念に行う。
21:00	○星空観察	・生涯学習課の職員と連携して星に関す
21:30	○児童就寝	る指導を行う。 ・夜更かしをしないよう、見回りをする。 ・翌日の動きについて保護者と打ち合わ せをする。
【2日目】 6:00 6:30 6:45 8:00	<ul><li>○起床・洗面</li><li>○ラジオ体操</li><li>○朝食</li><li>○段ボール撤去・掃除</li></ul>	・児童がすばやく行動することができるよう、指示出しを行う。
9:00	<ul><li>○防災学習IV</li><li>・保戸野地区の災害について</li><li>秋田大学 林信太郎 先生</li></ul>	・質疑応答などの進行を行う。
10:30	○閉所式	<ul><li>・感想を発表しあう場を設け、学びを広げるようにする。</li></ul>
11:00	○児童引き渡し訓練・解散	・引き渡しの際に混乱しないよう、事前に 教師間で確認しておく。

# 学校危機管理の現状と課題

カリキュラム·授業開発コース 2518413 渡辺雄介

### 単元の目標

- (1)学校周辺の地域について、<u>自然災害等の現状を知り</u>、 それぞれの災害に対応した避難行動を取ることができる。
- (2)災害に対して、自らの安全を確保するための<br/>
  日常的な<br/>
  備えができるようにする。
- (3)安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、今後の生活に生かすことができる。

### 単元観

- 学校の位置する保戸野地区は、町中に位置しており、地震による 建物の倒壊や、大規模な火災の発生等が想定される。
- 防災教育として、避難所体験、野外炊飯などの非常時を想定した体験を行うことが必要。
- ・全校で防災キャンプを実施し、<u>災害への理解を深めるとともに、備</u> えができるようにしたい。

### 単元について

- 対象 秋田大学教育文化学部附属小学校
- 教科 総合的な学習の時間
- ・単元名 防災キャンプをしよう!



### 児童観

児童は、秋田市内各地から登校しており、<u>地域の一員としての自覚が薄い</u>傾向にある。防災教育を通じて、地域に対する理解を深め、地域の一員として安全で安心な社会づくりに参画する態度を育てたい。

学習に対しては、学んだことを実生活に生かすことに課題が見られる。災害にあった際に適切な判断をし、安全のための行動ができるようにしたい。

### 指導観

- 日本赤十字社、秋田市防災安全対策課、秋田消防署、消防団、各町内会、婦人会等の協力のもと、地域住民の参画を得て実施する。
- ・学んだ内容を今後の生活に生かすことのできるよう、防災 キャンプの事後に成果をまとめ、<u>自らの防災ブックを作る</u> 活動を行う。

### 全体計画

主な学習活動	目標	時数
○学校周辺の地域の自然災害の現状 を知り、防災キャンプへの必要感をもつ。	<ul><li>学校周辺の地域の自然災害の現状を 理解することができる。</li></ul>	1
<ul><li>○防災キャンプを行う。</li><li>・災害安全に対する実践力を身に付ける。</li><li>・秋田大学附属小学校が避難所となった際の、非難の仕方や避難所での過ごし方を体験する。</li></ul>	<ul><li>・様々な災害に対応した避難行動がとれるようになる。</li><li>・災害に対して、自らの身を守るための日常的な備えをすることができる。</li></ul>	10 (本時)
〇学んだ成果をまとめ、自分のための防 災ブックを作成する。	・安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、今後の生活に生かすことができる。	2

### 本時の実際(1日目②)

- ・【17:30】 夕食、片付け
- 防災学習皿「被災地からの報告」
- …岩手県大船渡市立末崎小学校 校長 熊谷拓郎氏
- ・宿泊をしない児童は帰宅する。
- 星空観察
- •【21:30】児童就寝

### 本時の実際(1日目①)

- •【13:30】 避難訓練
  - …地震を想定し、揺れが収まり次第、校庭に避難する。
- 防災学習 I 「消防団の活動」
- 防災学習 Ⅱ 救急救命講座
- ···AEDの使い方, 三角巾による固定・止血の仕方を学ぶ。
- •【16:00】 段ボールハウス設営, 炊き出し訓練

### 本時の実際(2日目)

- •【6:00】 起床・洗面、ラジオ体操
- ・段ボール撤去、掃除
- ・防災学習Ⅳ「保戸野地区の災害について」
- …秋田大学 林信太郎氏
- •【11:00】児童引き渡し訓練・解散

#### 校内研修プログラム

現職院生 阿部 匠

1 研修プログラム名 学校に避難所が開設されました。さて、どうする?

#### 2 研修のねらい

大地震等の災害が発生した場合,避難所としての指定の有無にかかわらず,多くの学校が緊急の避難所となる可能性が高い。そのため,勤務校が避難所となった場合を想定して,避難所開設区域設定の考え方や開設の手順等について理解することをねらいとする。

#### 3 主な研修内容

避難所開設区域の設定や開設手順について、図上訓練等により演習する。

#### 4 進備物

校舎配置図(A2版程度に拡大する),付箋(75mm×50mm),補助資料「避難所としての学校の部屋割りについて」

5 研修の実際(所要時間90分,1班5人程度を想定)

研修の	研修の実際(所要時間 90 分,1班5人程度を想定)			
	内 容	形態	活動	留意点
導	東日本大震災発生	全体	①避難所の写真等を見る。	○体育館に開設された避
入	後,学校に開設され		②救援物資の配布, プライ	難所や仮設トイレなど
(10)	た避難所の様子を理		バシー保護など避難者	の様子の分かる写真等
	解する。		自身も協力するべきこ	を用意する。
			とを理解する。	
展	避難所に必要な場	班	①班別となり本部や仮設	○校舎配置図,付箋を配
開	所(施設・設備) につ		トイレなど避難所運営	布する。
I	いて協議する		で必要となる場所 (施設	○緊急度は次のように設
(20)			・設備)を付箋に記入す	定する。
			る。	(高い) A-B-C (低い)
			②①で付箋に記入した場	
			所(施設・設備)を緊急	
			度A・B・Cにランク付	
			けする。	
			③要援護者に対して配慮	
			する点について検討す	
			る。	
展	補助資料を見て,	班	①班で協議した内容と補	○補助資料を配布する。
開	自分たちが協議した		助資料を見比べて,協議	○施設内で落ち着いた生
$\Pi$	内容と比較検討をす		内容を再検討する。	活ができる環境づくり
(20)	る。			と管理のしやすさに留
				意することを助言する。
展	避難所になったと	班	①校舎配置図に立入禁止	○円滑に進行できるよう
開	きを想定して、班ご		_ (非開放) 区域の記入	に適宜助言する。
$\Pi$	とに配置図を活用		②「緊急度A」の場所から	
(20)	し各部屋の部屋割		学校の部屋割りを行い,	
	りを検 討する。		校舎配置図に付箋を貼	
			っていく。	
			③各班で班員の意見をま	
			とめながら, 決定したも	
			のから校舎配置図に記	
			入していく。	
ま	発表と評価を行	全体	①班ごとに部屋割りの配	○振り返りの時間を確保
논	う。		置図について発表する。	する。
め			②避難所として学校の部	○各班の結果を評価する。
(20)			屋割りの例を示す。	
			③まとめ、総括をする。	

#### 【この研修により生み出される効果】

- ○全ての教職員が、学校が避難所となった場合の自分の役割を理解することで、危機管理意識の向上につながる。
- ○学校が避難所になることを想定し対策をとれば、災害時に主体的かつ臨機応変に対応できる。

☆災害時の対応として,避難所運営についてこの研修結果を活用し,開放区域や開放順序をあら かじめ決めておくことが,学校防災体制として重要であると考える。

※兵庫県教育研修所「防災教育研修プログラム」を参照

学校危機管理の現状と課題

# 緊急時対応

~深刻なものが起こったときに、どう対応するか~

カリキュラム・授業開発コース 2518401 阿部 匠

# 研修プログラム

「学校に避難所が開設されました。さて、どうする?」

(所要時間:90分 1班5人程度を想定)

仙北市生保内地区の地理的特徴

秋田駒ヶ岳の噴火により、地震が発生

地域住民は、道路を挟み隣接しているA小・中学校に自主的に 避難することが予想される。

↓もし、この動きが学校職員がいるときに起きたとしたら… 行政の指示を待っていると、パニックや騒動が起こる可能性 がある。

学校職員が率先して避難所開設に動かなければいけない。

〇研修のねらい

大地震等の災害が発生した場合,避難所としての指定の有無にかかわらず,多くの学校が緊急の避難所となる可能性が高い。 そのため,勤務校が避難所となった場合を想定して,避難所開設 区域設定の考え方や開設の手順等について理解することをねらう。

〇主な研修内容

避難所開設区域の設定や開設手順について、図上訓練等により演習する。

〇準備物

校舎配置図(A2版程度に拡大する),付箋(75mm×50mm),補助資料「避難所としての学校の部屋割りについて」

〇災害の想定

10月下旬,天候は秋晴れである。平日の朝8:00頃に秋田駒ヶ岳に大規模な噴火が発生し,それに伴う地震も発生した。火山性地震は,その後も断続的に発生している。これに伴い,地域住民100人ほどが学校に避難するために集まってきており,その数は増加傾向にある。電気,水道,ガス等のライフラインは途絶してしまったが,幸いなことに噴火による校舎の被害はなく,危険な箇所も見受けられない。

1 導入(10分 形態:全体)

• 内容

東日本大震災発生後、学校に開設された避難所の様子を理解する。

- 活動
  - ①避難所の写真等を見る。
  - ②救援物資の配布、プライバシー保護など、避難者自身も協力するべきことを理解する。

2 展開 I (20分 形態:班)

• 内容

避難所に必要な場所(施設・設備)について協議する。

- 活動
  - ①班別となり、本部や仮設トイレなど避難所運営で 必要となる場所(施設・設備)を付箋に記入する。
- ②①で付箋に記入した場所(施設・設備)を緊急度A・B・C(Aが高い)にランク付けする。
- ③要援護者に対して配慮する点について、検討する。

3 展開Ⅱ(20分 形態:班)

• 内容

補助資料を見て、自分たちが協議した内容と 比較検討をする。

- 活動
  - ①班で協議した内容と補助資料を見比べて, 協議内容を再検討する。

# 補助資料 (一部抜粋)

る環境	る環境づくりと管理のしやすさに留意する。				
大分類	部屋名•設置場所	緊急度	部屋割りの考え方		
		学校に入る避難者数との関係で、必ずしも必要な空間をすべて確保できるとは限らない。時間の経過に合わせ、避難者が減ってきた段階で共有部分を増やすようにする。			
	本部室	Α	正面玄関近くの部屋を借りる。		
	物資置き場	Α	外部からトラックなどが入りやすい場所 (状況に応じて野外にテントを張ることもある)		
	医務室	Α	保健室を活用(近くに休憩室が設けられることが望ましい)		
	ボランティア・ルー		できれば本部室の近くに設置する。		
	厶	Α			
	情報掲示板	Α	正面玄関近くの壁面を利用して避難者に情報を提供する。		
	受付	Α	正面玄関近くにテーブルを置く。		
	ペット飼育スペー	_	鳴き声などの関係から校舎から離れたグラウンドの一角に設置する。(できれば雨		
A A		A	があたらない場所)		
	仮設トイレ	Α	校舎の近くであまり目につかない野外の場所で、バキュームカーが入れる場所。		
		^	できれば清掃用の水が近くにある場所(夜間使用のために仮設トイレへの照明の配線が必要)		
	仮設電話	Α	正面玄関近くに設置する(枚内放送設備がある場所の近く。枚内放送をしないで伝言メモを避難者		
		^	に渡す方法もあり)		
	倉庫	В	教室の机、椅子の収納のための倉庫が必要である。(避難者が多い場合は、机や椅子は麻		
共有空間		В	下に積み上げている例が多い)		
	配給所	В	義援 (救援) 物資などを配給する場所。物資置き場の近くで、配給時のみ一時		
B		В	的に廊下を使う方法もある。		
	更衣室	В	居住空間の近くの小部屋を確保する。(体育館内の小部屋を利用しているケースが多い)		

☆学校の施設内の部屋割りのレイアウトを決めるときは、施設内で落ち着いた生活ができ

### 5 まとめ(20分 形態:全体)

- 内容発表と評価を行う。
- 活動
  - ①班ごとに部屋割りの配置図について発表する。
  - ②まとめ・総括と振り返りをする。

### 【終わりに】

☆災害時の対応として,避難所運営についてこの研修結果 を活用し,開放区域や開放順序をあらかじめ決めて おくことが,学校防災体制として重要であると考える。

☆この研修を小学校と連動して行うことで、災害時の 避難所間の格差解消にも役立つのでないかと考えられる。

※参考・引用文献 兵庫県教育研修所「防災教育研修プログラム」 13

### 4 展開皿(20分 形態:班)

• 内容

避難所になったときを想定して、班ごとに配置図を活用し各部屋の部屋割りを検討する。

- 活動
- ①校舎配置図に立入禁止(非開放)区域を記入する。
- ②「緊急度A」の場所から学校の部屋割りを行い、 校舎配置図に付箋を貼っていく。
- ③各班で班員の意見をまとめながら、決定したものから校舎配置図に記入していく。

7.0

### 【この研修により生み出される効果】

- 〇全ての教職員が学校が避難所となった場合の自分の役割 を理解することで、危機管理意識の向上につながる。
- 〇学校が避難所になることを想定し対策をとれば, 災害時に主体的かつ臨機応変に対応できる。

12

#### 学校の危機管理現状と課題

#### 「国語総合」学習計画

学卒院生

照井佳那子

(秋田県立A高等学校 1年 B組 )

1. 単元名 自分専用の災害用マニュアルを作ろう

#### 2. 単元目標

- ・災害時を想定し,必要感をもって情報収集・整理に取り組み,マニュアル作成に取り組もうとしている。 (関心・意欲・態度)
- ・目的に応じて情報の取捨選択をし、読み手の理解が得られるよう分量や優先順位を判断して 文章の構成を工夫している。 (書く能力)
- ・語句や文の意味を理解し、表現の特色やその効果などを捉え、自分の表現に役立てている。 (知識・理解)

#### 3. 取り上げる言語活動と教材

- (1)言語活動・調べたことを整理して、報告書や説明資料などにまとめる活動。
  - ・災害用マニュアルの内容についてグループで検討や推敲, 発表を行う活動。
- (2)教材 各市町村の公式ハザードマップや防災計画。

#### 4. 教材観

自然災害はいつ発生するのか予測が困難である。また災害発生時には、生徒が自らの判断で避難し、身の安全を確保しなければならない事態が起こることも想定される。

国土交通省ハザードマップポータルサイトでは、全国の各市町村が作成したハザードマップを 見ることができる。また、秋田県防災ポータルサイトでは防災関係ガイドラインやマニュアル等 を確認することができる。これらの公的機関が作成する防災マニュアルやハザードマップを一 読する場面を設定すると共に、いつ起こるかわからない自然災害に対して生徒の危機意識を高 め、対策として自分専用の災害用マニュアルを作成したい。

#### 5. 生徒観

秋田市内外から登校する生徒も多くいる。多くの生徒がアルバイトをしており、自宅、学校、アルバイト 先と活動の範囲が広い。災害時には、どこに避難し、何に気を付けたらよいのかを、それぞれの活動圏の 特徴をもとに適切な判断をする必要があると考えられる。

とくに本単元では、災害時に、生徒の自主的な判断で動かなければいけないような状況が想定される自宅とアルバイト先での災害発生を想定し、マニュアル作成を通して危機管理意識を高めたいと考えている。

#### 6. 単元の評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
災害時を想定し,必要感をもって情	目的に応じて情報の取捨選択をし、	語句や文の意味を理解し,表現の特
報収集・整理に取り組み, マニュア	読み手の理解が得られるよう、分量	色やその効果などを捉え,自分の表
ル作成を行おうとしている。	や優先順位を判断して文章の構成	現に役立てている。
	を工夫している。	
	(「B書くこと」の(1)のア)	

#### 7. 単元計画 (全6時間)

	٠.	<b>単元計画</b> (全 6 時間)				
時		目標		学習活動		評価規準と評価方法
					•	災害時の対応について必要
1	$\circ$	災害時を想定し, 自分事と	1.	東日本大震災や大雨時の秋		感を持ち、意欲的に取り組
2		して興味や関心を持つ。		田市の状況について,どの		もうとしている。
				ようなことがあったのか意		(授業の様子・記述の確認)
		自宅やアルバイト先でどの		見交換を行い,災害につい		
		ような災害が起こりうるの		て関心をもつ。		
		か, また, 被災した際				
		どのような被害が想定され	2.	秋田県のホームページや国	•	災害時の状況や行動につい
		るのか考える。		土交通省が公開するハザー		て想定し、必要な情報を調
	0	自宅やアルバイト先で被災		ドマップを参考に調べ学習		べることができる
		した際、どこに逃げるのか		を行い、ワークシートにま		(授業の様子・記述の確認)
		(1次避難,2次避難)		とめる。		
		何に注意するべきかを調べ				
		考える。	3.	まとめた内容を家庭に持ち		
	$\bigcirc$	ワークシートの内容を家庭	•	帰り、身近な大人の視点を		
		で検討する。(課題)		踏まえて検討する。		
				四よんで依的 かる。		調べた内容について他者の
3	0	調べた内容について意見交	1	グループワークを行い,被		意見を参考に再検討を行う
4		換や再検討を行う。	٦.	害の想定や避難場所につい		ことができる。
(5)		换个份换的在11万。		て意見交換や相互検討を行		(授業の様子・記述の確認)
(3)						(技業の様子・記述の雑誌)
		(((中田コー マルナ))ケーナフ		<b>う</b> 。		<b>はおの氏体型打ち行い。</b>
	0	災害用マニュアルを作成する。		押った中央ともした《中田		情報の取捨選択を行い、読したまなりは
			5.	調べた内容をもとに災害用		み手や目的に応じてまとめ
				マニュアルを作成する。		ることができる。
						(授業の様子・記述の確認)
		W # II				
(6)	0	災害用マニュアルの発表会	6.	グループを再編成し、災害	•	災害用マニュアルの発表と
		を行う。		用マニュアルの発表と検討		検討を行い、災害時の対応
	0	授業の振り返りを行う。				について考えることができ
				会を行う。		る。
			7.	振り返りとして編集後記を		(授業の様子・記述の確認)
				マニュアルに記載し、マニ		
				ュアルの内容を写真で携帯		
				電話に保存する。		

# 学校の危機管理の現状と課題

カリキュラム授業開発コース 照井佳那子 2019.2.1

1

### 生徒観

居住地 秋田市内外

活動の範囲 自宅 学校, アルバイト先



災害時に、生徒は自主的な判断で行動しなければいけない

2

### 「国語総合」学習計画 指導案

- 1. 単元名 自分専用の災害用マニュアルを作ろう
- 2. 単元目標
- ・災害時を想定し、必要感をもって情報収集・整理に取り組み、マニュアル作成に取り組もうとしている (関心・意欲・態度)
- <u>目的に応じて情報を取捨選択し、読み手の理解が得られるよう</u> 分量や優先順位を判断して文章の構成を工夫している。

(書く能力)

・語句や文の意味を理解し、表現の特色やその効果などを捉え、 自分の表現に役立てている。 (知識・理解) 3

### 単元で身に着ける国語の力

目的 読み手・場面

「書くこと」

- ① 様々な媒体の中から必要な情報を取り出し、<u>何を伝えたいの</u>かということを明確にする力
- ② 文章が<u>どのような読み手に、どのような場で</u>読まれるのかを想定し、それに応じた情報の文量と優先順位を判断して文章の構成を工夫する力
- ②情報の扱い方に関する指導の改善・充実

情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすることが、話や文章を正確に理解することにつながり、また、自分のもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることが、話や文章で適切に表現することにつながるためこのような情報の扱い方に関する「知識及び技能」は国語科において育成すべき重要な資質・能力の一つである。

平成30年7月 文部科学省 高等学校学習指導要領解説 国語編

### 新学習指導要領 共通必履修科目「現代の国語」

B 書くこと(1) 書くことに関する事項

- ア目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、 集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確に すること。
- イ 読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度 などを考えて、文章の構成や展開を工夫すること。

文部科学省 高等学校学習指導要領(平成30年3月公示)より抜粋

教材観 「何を伝えたいのか(目的)」

「どのような読み手に、どのような場で読まれるのか(読み手・場面)」

✓公的機関が作成する防災マニュアルやハザードマップを一読 する場面を設定

✓いつ起こるかわからない自然災害に対して生徒の危機意識を 高める(読み手は自分)

国土交通省ハザードマップポータルサイト

大雨

全国の各市町村が作成したハザードマップを掲載

地震

秋田県防災ポータルサイト

秋田県の防災関係ガイドラインやマニュアル・関係資料等を掲載

6

### 単元計画(全6時間)1,2時間目ポイント

- ✓活動に対する必要感
- √情報の取捨選択(妥当性や信頼性、文量や優先順位)
- ✓家庭内での防災意識共有

単元計画(全6時間)3,4,5,6時間目 ポイント

目標	学習活動
	7. 振り返りとして編集後記を マニュアルに記載し、マニュアルの 内容を写真で携帯電話に保存する。

- ✓本単元の学びに対する必要感
- ✓適切な知識に基づいた自主的な判断
- ✓「書くこと」が日常生活にいきる

8

#### 心のケア校内研修会 実施案

現職院生 池田 和馬

秋田県立A特別支援学校 研修時間:1時間30分

1 研修会名 心のケア研修会

#### 2 研修会の目的

- ・大災害\*発生時における子どもの心理的状況や心のケアの基本的理解について深める。
- ・ストレス症状のある子ども(障害のある子どもを含め)への基本的対応について学んだり、自校の実態に合わせた対応策を検討したりする。

#### 3 研修の実際

#### (1) ねらい

・心のケアの基本的理解を深め、自校の児童生徒に合わせた対応策を検討する。

#### (2) 研修会の流れ

時間	研修の内容	講師としての支援
5	1 本研修の目標、流れの確認 目標:大災害発生時における子どもの心理状 況や心のケアの基本的理解を深め、自 校に合わせた対応策を検討する。	・見通しをもたせることができる ように、研修のゴールを確認し た上で、本時の流れを説明する。 また、活動の流れの一覧や時計 を前面に掲示する。
1 0	<ul><li>2 大震災の映像の視聴</li><li>・ビデオの映像とプレゼンによるスライド写真を 視聴する。</li></ul>	・より身近に感じることができる ように、研修旅行で訪れた場所 や聞いた内容を交えながら、映 像を視聴する。
2 0	3 災害等発生時の子ども(障害のある子を含む) の心理面やストレス症状、対応の基本を説明 →資料1の第1章2,第5章4を中心に ※第1章 2災害や事件・事故発生時における心 のケアの基本理解 第5章 4障害のある子どもの心のケア	・研修内容4につながり、本校に合わせた想定や対応策を検討できるように、学校医やスクールカウンセラーと協力しながら、理論的な話よりも具体的な状態や症状、対応を説明する。また、本校の児童生徒を想定したいくつかの具体例を提案する。
4 0	4 グループに分かれて、ワークショップを行う (1)本校児童生徒の実態において想定される症状 や状況の洗い出し (2)洗い出した想定に合わせた対応策の検討	・具体的な内容を深める協議になるように、近隣の学部や学年のグループ構成にする。また、様々な視点で多くの意見が出るように付箋と模造紙を使う。

1 0	5 各グループの発表(全体での共有)	・各グループの情報を十分に共有
	・模造紙をホワイトボードに貼り、発表する。	できるように、要点を押さえ「想
		定に合わせた対応策」を中心に
		発表するように説明する。
5	6 振り返りと今後の予定	・本研修を今後の学校の組織づく
	(1)まとめと感想発表	り、危機管理対応の一助とする
	(2)今後の予定	ために、想定した内容を元にし
	①今回の研修で想定した内容と対応をマニュ	た「災害等発生時における子ど
	アル化	もの心のケアマニュアル」を作
	②マニュアル再検討の会(研修会 2 )を実施	成、次回の研修会で再検討する。
	③次年度の危機管理マニュアルへ反映	また、次年度の危機管理マニュ
		アルへ反映することを伝える。

※大災害とは、「規模の大きな災害。特に、大地震、大型台風、火山の噴火など、人間の社会生活や 生命に大きな被害をもたらす自然災害」と定義する。

#### 【参考資料】

資料1 「子どもの心のケアのために-災害や事件・事故災害発生時を中心に-」

(文部科学省, 2010)

資料2 「学校における子どもの心のケアーサインを見逃さないために一」

(文部科学省, 2014)

資料3 「震災後における子供の心のケアのために」

(宮城県教育委員会, 2013)

### 大災害発生時における 子どもの心のケア校内研修会

秋田県立A特別支援学校 池田和馬

# 大災害とは、







マグニチュード7以上

「人間の社会生活や生命に大きな被害を もたらす自然災害」と定義する。

<2>

<4>

## 本校の児童生徒

主として知的障害



特別支援学校

発達障害 (ASD、ADHD、LD等) <u>肢体不自由等</u> (脳性まひ、その他)

### 研修会の目的

- 大災害発生時における子ども(障害の ある子どもを含め)の心理状況や心の ケアの基本的理解を深める。
- 自校の実態(障害のある子どもを含 め)に合わせた対応策を検討する。

### 研修の流れ

- ①研修の目標、流れの確認
- ②大震災の映像の視聴では
- ③子どものストレス症状、対応の基本を説明
- 4想定の洗い出しと対応策の検討であ
- ⑤各グループの発表
- ⑥振り返り(対応マニュアル作成に向けて)であ



-大震災の映像の視聴

より身近なことに感じる ことができるように、 研修旅行で訪れた場 所や聞いた内容を交え ながら、映像を視聴!



# ポイント2

・想定の洗い出しと対応策の検討

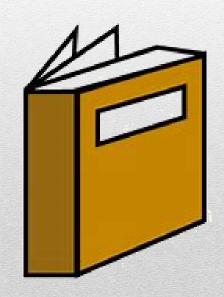
付箋紙と模造紙を使い、 児童生徒の障害特性 や実態から考えられる 想定を洗い出し、対応 策を検討!



# ポイント3 🔞

・振り返り(対応マニュアル作成)

次回、「大災害発生時に おける子どもの心のケア マニュアル」を作成、再 検討。次年度の危機管 理マニュアルへ反映!



学卒院生 稻継 大輝

#### 第2学年A組 特別活動指導案

指導者 T1 稲継 大輝

T2 (養護教諭)

T3 (学年主任)

1 題材名 「今の自分にできること」

学級活動 (2) エ 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成

- 2 題材設定の理由
  - (1) 生徒について

本学級は、男子 14 名、女子 16 名の計 30 名の学級である。普段は、男子・女子関係なく仲が良く、休み時間には談笑している姿も見られるような明るい雰囲気の学級である。また、活発な中にも周囲に気を配れる思いやりの精神をもつ生徒が多く、優しさにもあふれた学級である。

今回発生した近畿地方内陸地震に伴って生じた「西日本大震災」の影響を受け、本校をはじめ、多くの近隣小・中・高等学校で児童生徒や教職員における犠牲者・被災者の情報が報道機関等を通じて発信された。幸い本学級における犠牲者はいなかったものの、家屋の倒壊や火災などによって友人や家族、親戚を亡くしてしまった生徒が多数おり、他学級においては不幸にも犠牲者になってしまった生徒がいる状況である。その震災から約3ヶ月が経とうとしている現段階でも、生徒たちの表情は暗く、以前のような学習活動への参加意欲や活気は感じられない状況である。また、友人と話し合うような姿も見られなくなっており、周りの状況を鑑みるあまり、震災によって受けた精神的な傷・苦痛・負担などを自分一人で抱えたままになってしまっている生徒も少なくない状態である。

このままでは精神的苦痛から体調を崩してしまったり、授業に集中できなかったりすることなど が継続してしまい、健康的な学校生活が破綻する可能性が非常に高いと考えられる。

#### (2) 題材について

本題材は、上記のような生徒の状況を踏まえ、特別活動の内容項目である「学級活動 (2) エ 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成」において、「今の自分にできること」という 題材を設定し、現段階における自己の状況と向き合うことを通じて自己理解を図るとともに、その中でもその原因・背景の解消・解決・改善に向けて今の自分にできることを考え、今後の学校生活 や私生活に対する希望をもつことを図りたいと考え、設定したものである。

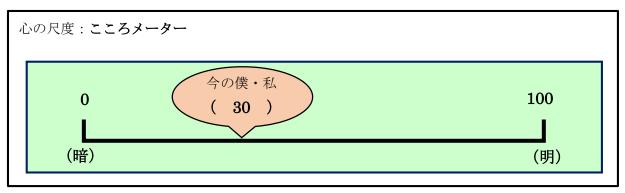
また、今回行う活動の中で、同じように苦しんでいる仲間がいることに気付き、自分の苦痛を感じる状況を責めることを止め、自己の状況を受け容れるとともに、こんな状況だからこそ仲間と協力して乗り越えていこうとする姿勢をもつことにつなげたいという思いもある。

本時で得た学びは、今後様々な困難が目の前に立ちはだかった時にそれを乗り越えるための方策の検討・実行に関連すると考えられ、協働的に働くことが求められる現代の社会において、1つの「生き方」を学ぶ学習にもつながっていくと考える。

#### 3 事前指導

本時の学習を行う前段階において、今の生徒の心的状態を把握するために調査を実施する。その中で、以下のような心的状態を示す尺度(資料① 心の尺度「こころメーター」)を提示し、今の自分の状態を視覚的に捉えられるようにする。その結果を用いながら、なぜメーターをそう表したのか、その背景に存在すること(生徒の考える原因や今抱えている不安)を付箋紙に書き込んでいき、それらを踏まえて本時の学習につなげていきたいと考える。

その際、生徒への精神的影響を鑑みて、個人面談を実施する。直接生徒の話を聞くことで、本時の学習において、仲間との話し合いの中で自分の状況や思いを共有することが可能であるかどうかなどを精神的負担への配慮(心のケア)をしながら生徒本人との相談のもと決めていきたいと考える。また、面談を行うことで生徒一人ひとりが抱えている状況の把握にもつながると考えられる。



資料① 心の尺度「こころメーター」(度合いで示す)

#### 4 本時の実際

#### (1) ねらい

被災後に起こった自己の変容について見つめ、理解するとともに、今の自分にできることを考える ことができる。

#### (2) 本時の展開

時間	学 習 活 動	教 師 の 支 援 と 評 価
時 導入 ( 5 分)	学 習 活 動  1 本時の学習活動を確認する。  2 事前指導で書いた付箋紙を基にグループで 意見を出し合い,共通事項をまとめる。	教 師 の 支 援 と 評 価  ・見通しを持って学習に取り組めるよう, 本時の全体像について説明し, 黒板に掲示する。 ・自己の変化・成長を後々ふり返られるよう, ワークシートを配付し記入するように指示する。  ・様々な意見・考えにふれられるよう, 教師が書いた付箋紙の内容を提示する。 ・精神的に負担がかからないよう, T1 や T2, T3 が机間指導を行いながら生徒の
展開 ( 35 分)	3 学習課題を確認する。 学習課題: 今の自分にできることを考えてみる。 4 心的状態に関連する事象を踏まえ、それら を解消するために今自分できることを考 え、グループ内で意見交換を行う。	様子を見守る。 ・現在の心身の状態の変化が自然なことであることを意識できるよう,過去の災害における事例を提示する。
終末 (10 分)	<ul><li>5 「今の自分にできること」について感じたことや考えたことをまとめる。</li><li>6 本時のふり返りを記入する。</li></ul>	被災後に起こった自己の変容について見 つめ、理解するとともに、今の自分にで きることを考えることができる。 (発言・ワークシート・ふり返り)

学校危機管理の現状と課題

### 【事後対応】

# 中学校2年 学級活動「今の自分にできること」

ままざめチーム

### 〈生徒について〉

- ·中学校2年A組(男14名、女16名、計30名)
- ・西日本大震災により、多くの犠牲者
- ・本学級に犠牲者はいないが、他学級の生徒や家族、 親戚などが犠牲に
- ・3か月が過ぎても生徒たちの表情は暗い
- ・震災で受けた精神的な傷を一人で抱えている生徒も

### 〈題材について〉

### 学級活動(2)工

心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成 (題材名)「今の自分にできること」

- ・現状と向き合い、自己理解を図る
- ・友達の思いを知り、協力して乗り越えていこう とする姿勢につなげる → 「**生き方**」

〈本時のねらい〉

被災後に起こった自己の変容について見つめ、理解するとともに、今の自分にできることを考えることができる

### (事前)

### ポイント(1)

心の尺度や付箋を用いた心的状況の把握

0 100

面談

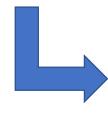
一人一人の状況を把握 精神的負担にならないように配慮

### (本時)

### ポイント②

付箋をもとにしながら、グループで各自 が自分の状況を話す場を設定する

- ・話せることだけ(事前の面談で確認)
- ・自分の思いを伝える
- ・友達の思いを知る



災害後には、そのような心身の変化が 起こることが自然なことであることを知る

### (本時)

### ポイント(3)

自分や友達の思いをもとに、「今の自分 にできること」を考える

### 難しい場合は

・友達の話を聞いて、感じたことや考えたこと



友達の気持ちを受け止めた上で、 **自分の内面と向き合う** 

### (事後)

- ・授業の中で、友達と対話する場を多く設定
- ・全職員で生徒一人一人を見て、積極的な声かけ
- ・職員間での情報交換
- ・関係機関や保護者との連携

#### 学校における地域の復興に向けた研修会

現職院生 高橋 司

1 研修場所 秋田県立A高等学校

2 研修参加者 A高校全教職員

3 研修時間 90分程度

4 研修テーマ 「高校生に身に付けさせたい力の育成」

~地域の復興を支える創造的探究活動を通して~

5 研修のねらい

秋田沖地震により、地域の経済や生活環境が悪化。過疎化がさらに進むとともに、人間関係や地域社会とのつながりが希薄になりつつある現状である。探究活動の授業での地域や復興の課題に携わる学びを通して、地域との関わり、社会との関わりを意図的に作ることで、主体性や創造性を育むことができる。学校全体で取り組む探究活動について共通認識を図るとともに、目指すべき力の育成に向けて、指導方法や評価について研修会を通じて学ぶ。

#### 【生徒に身に付けさせたい力】

- ①地域つくりや復興に向けて、自分たちができるアイデアを出し合い、探究的な活動を 実践することで地域課題を発見できる力を身に付ける。
- ②地域を活性化する主体となることで自信を持たせると同時に仲間と協力しながら活動する中で困難に立ち向かう粘り強さを身に付けさせる。
- ③高校生の視点に立ち、地域の現状や復興に向けた取り組みなどを発信できるコミュニケーション能力を身に付けさせる。
- 6 研修会(90分)
  - 1) 研修会の説明(5分) 研修会のねらいと概要説明
  - 2) 実践例の紹介(10分) 実践事例の紹介
  - 3) 実践演習(40分) 4人1グループで演習
    - ①KJ法によるアイデアの提案
    - ②情報の共有と整理
    - ③実践可能な具定例の提案
  - 4) ワールドカフェ方式による発表(20分)
  - 5) 指導方法、評価について(10分)
  - 6) 今後の取組みについて (5分)

#### 7 その他

- ・会場は大会議室(プロジェクター・スクリーン・マイク準備) 担当(総務部)
- ・準備物(模造紙・付箋紙・各種マジック)

担当(教務部)

・アイデア用紙 (A4用紙)

担当 (研修部)

#### 研修過程

時間	研 修 内 容	講師の支援・演習活動
5分	1 研修の説明(探究活動運営委員長)	・学校全体で共通認識のもと探究活動を実践することを確認する。
10分	2 実践例の紹介(探究活動企画班)	・再生エネルギー探究班の実践例 をもとに説明する。 ①課題の設定 ②情報の収集 ③実験・調査 ④整理・分析 ⑤まとめ・表現
40分	3 実践演習(4人1班のグループで演習)	(演習活動)
	①KJ法によるアイデアの提案	・アイデアを付箋紙に書き、発想
	②情報の共有と整理	やねらいを話しながら模造紙に
	③実践可能な具体例の提案	貼り付けていく。
		・グループ化しながら、課題や解
	☆支援は探究活動企画班	決する方法をまとめる。
		・班で一つの探究テーマを設定し、
		一年間の戦略を練る。
		★先進校視察をした探究活動企画
		班がファシリテーター役を務め、
		各班に助言や指導していく。
20分	4ワールドカフェ方式により発表しあう。	(演習活動)
	・説明する順番を決める(5分×4回)	・説明を聞きながら質問する。
	・一人を残して他の発表を聞きに行く	・アイデアがあったら伝える。
		★聞く人数は大体均等になるよう
10.0	= He Me L. VI. = FF free land	に探究班は調整する。
10分	5 指導方法、評価について	・探究活動の評価(ルーブリック)につ
		いて説明する
		・連携、ネットワークについて紹
		介する。
		・発表や情報発信について説明す
- /\	0 人 4 の 野 40 に っ い マ	る。 ************************************
5分	6 今後の取組について	・探究活動の一年間の流れを説明
		し、全体像を把握させる。

#### 【参考資料】

資料1 高校生による復興まちづくり (盆子原歩、赤澤邦夫)

オペレーションズ・リサーチ (2014年6月号)

資料2 地域のニーズに応える高校づくりの推進 (P8~P9)

新県立高校将来構想(平成25年2月宮城県教育委員会)

資料3 福島県ふたば未来学園のカリキュラム・マネジメント

学校における地域の復興に向けた研修会

研修テーマ

高校生に身に付けさせたい力の育成 ~探究活動を通して地域の復興に貢献する~

探究活動のねらい

背景

被害

現状

- 地域との関わり、社会との関わりを意図的に作 ることで、主体性や創造性を生徒に育ませる。

研修のねらい

学校全体で取り組む<u>探究活動</u>について共通認 識を図るとともに、目指すべき力の育成にむけ て、指導方法について研修会を通じて学ぶ。

- 研修会(90分)
- 研修の説明(5分) 研修のねらいと概要説明

②地域のつながりの悪化(過疎化、少子高齢化)

☆人間関係や地域社会とのつながりが希薄になりつつある

実践事例の紹介 実践例の紹介(10分)

20XX年に秋田沖大地震が発生した。

③エネルギー不足による生活の変化

①地域経済の悪化(他県への流出)

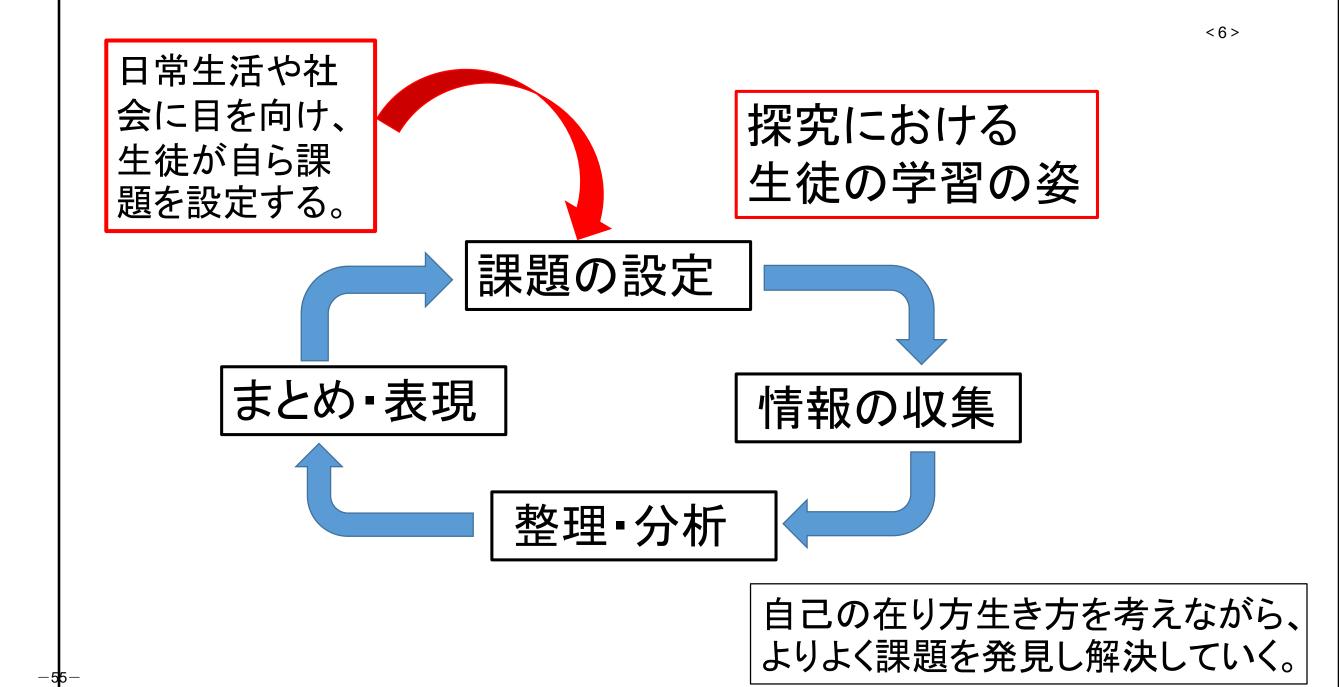
①電気、水道、ガス、通信などのライフラインの停止

- 4人1グループで演習 実践演習(40分)
  - ①KJ法によるアイデアの提案
  - ②情報の共有と整理

②公共交通機関の被害

- ③実践可能な具体例の提案
- ワールドカフェ方式による発表(20分)
- 指導方法について検討(10分)
- 今後の取組みについて(5分)

- 生徒に身に付けさせたい力 研修会の説明
- ①地域つくりや復興に向けて、自分たちができるアイデア を出し合い、探究的な活動を実践することで地域課題を 発見できる力を身に付ける。
- ②地域を活性化する主体となることで自信を持たせると同 時に仲間と協力しながら活動する中で困難に立ち向か う粘り強さを身に付けさせる。
- ③高校生の視点に立ち、地域の現状や復興に向けた取り 組みなどを発信できるコミュニケーショ能力を身に付け させる。



### 実践例の紹介

### 再生エネルギー探究班





秋田次世代エネルギーパーク施設研修を訪問

再生可能エネルギー の開発は、日本の抱 えるエネルギー問題 の解決だけでなく、こ れから少子高齢化に 向かう秋田県内の経 済活性化に係わる事 業であることについ て協議する。





世界第3位の地熱大 国日本のなかでも、 秋田県は、大分県・岩 手県と並ぶ"地熱県"

湯沢市上の岱地熱発電所・山葵沢地熱発電所に おけるフィールト・ワークを実施し、秋田県における今後の 再生可能エネルギーの可能性について考える。





にぎやかな

時はいつ?

「課題発見」「情報発信」

・再生可能エネルギーの研究 ハワイ州エネルギー局 エネルギー問題についてディスカッション(モアナルア高校交流)

### 実践演習(指導法の研修)

### 地域の復興にむけて゚



賑やかにするために 商店街

を活用できないか!

仲間と協力して 実行できる力

地域との交流を深めたり、 情報発信できる力

### KJ法

画

#### 商店街をにぎやかにする テーマ

調 市役所で聞 査 く・調べる

商店街を訪問 イベント調査

> 商店街同士 のつながり

> > 招福狐の

行列

聞き取り調査 住みやすさ

> 人が集まるの はどんなとき?

> > ポスター

の作成

イベント ヤートセ

スタンプ ラリー

綱引き 音楽祭 大会 吹奏楽

> ゆるキャ ラ開発

兀

グルメ・ 屋台

信

広報紙の 作成

> 体験談の 発表

PR活動

参加

イベント

< 11 >

HPへの

掲載

4 ワールドカフェ方式による発表(5分×4回)

各グループの発表を聞 いて指導の参考とする

たり、まとめる力

探究活動について発表する

- ①課題の設定
- ②情報の収集
- ③実験・調査
- 4整理・分析
- 5まとめ・表現

地域を賑やかに テーマ

- 説明を聞いて質問する。情報を共有する。
- 意見やアイデアがあったら伝える。
- 発表を聞いて、参考にできるところは押さえておく。

### 指導方法について

### ①探究活動の評価について

#### C. 評価・処理 D. 考察・検 E. 表現・発 A. テーマ 証(25%) (30%)(25%)表(10%) 設定(10%) 価 実験・調査による 探究活動全体がわか テーマに従って何|探究活動計画が明確|実験・調査で得られ を明らかにしたい | であり、必要かつ妥 | た結果やデータに信 考察が妥当かつわ 当な実験や調査方法|憑性があり、かつ適 │かりやすい。また │現を用いて入れ表現 かが明確であり、 わかりやすく述べ|が記載されている。|切に処理している。 結果も明記されて されている。 論理展 られている。(8~ (24~30点) (20~25点) いる。 開もわかりやすい。 10点) (20~25点) (8~10点) テーマに従って何|探究活動計画はある|実験・調査で得られ 実験・調査による 探究活動全体が適切 を明らかにしたい | が、必要かつ妥当な | た結果やデータに信 はないが、記載内 かが明確であるが、実験や調査方法に不|憑性はあるが、処理 わかりやすく記載 │ 備がある。(15~23 │ の仕方に不備がある。│ 容がわかりにくい。│ がある。(5~7点)│ されていない。(5 点) (13~19点) (13~19点) テーマに従って何 | 探究活動計画が不明 | 実験・調査で得られ | を明らかにしたい「確であり、実験や調」た結果やデータに信 考察に無理があり | かが不明確である。| 査方法に不備がある。| 憑性に欠けるが、適 飛躍する部分が見 があるが論理展開に (3~4点) (9~14点) 切に処理している。 られる。 不備がない。(3~4 (6~12点) (6~12点) 考察や検証がなさ テーマに従って明|探究活動計画がなく、実験・調査で得られ 探究活動全体の内容 が不明確あり、論旨 らかにしたいこと │実施した実験や調査│た結果やデータに信 |れていない。 がない。 方法が妥当ではない。憑性がなく、処理も (0~5点) もわかりにくい。 (0~2点) (0~8点) 不適切である。 (0~2点)

(0~5点)

### ②支援•情報発信

連携先について

- •市役所、町役場
- •商店街、地域振興局
- -OB, OGとの連携
- ・大学や企業
- •NPO法人
- ・他校との連携

情報発信について

- ・校内外での発表
- ・広報の作成
- ·HP
- •学会や各種発表会

#### A高等学校1年1組 総合的な探究の時間(復興教育)学習指導案

日時:××年5月〇日(〇)5・6時間目

学卒院生 山口 裕平

1. 題材名 土崎復興プロジェクト!~地域の復興に貢献する探究活動を通して~

#### 2. 題材の目標(総合的な探究の時間)

- (1)地域の復興に貢献しようと、仲間と協力しながら粘り強く探究することができる。
- (2)地域の課題を発見し、情報を集め、分析・解釈して、工夫して表現することができる。
- (3) 主体的に探究し、互いのよさを生かしながら、地域に貢献していこうとすることができる。

#### 3. 生徒と題材

秋田沖大地震から3年が経ち、生徒たちも段々と安定した学校生活を取り戻しつつ ある。しかし、生徒たちの多くは自分自身に自信が持てず、困難に立ち向かおうとする 姿が少ない。さらに、本校のある土崎地区は未だに復興が進んでいない状況である。

本題材では、土崎の復興に向け、地域と連携した探究的な活動を行い、仲間と協力しながら困難に立ち向かう粘り強さやふるさとに貢献しようとする心を育てていきたい。また、特別活動では復興ボランティア活動を継続的に行い、仲間や地域とのつながりを形成するとともに、相手の立場に立った行動がとれるような思いやりのある生徒を育てていきたい。

#### 4. 総合的な探究の時間における題材計画(太枠本時)

テーマ	実施時期	学習活動	ねらいを達成した生徒の姿
地域の復し	5 月	復興とは何か,私たちが地域に貢献 できることはないかを考える。	復興とは何か, 私たちが地域に貢献 できることはないかを考えている。
地域の復興と現状	5 月	地域の復興に向け,グループごとに 探究活動を行うテーマを決め,今後 の見通しをつかむ。	探究活動を通して, 土崎の復興に貢献していくための見通しをつかめている。
探究活動	6月 ~ 1月	現地調査や地域と連携した活動を 通して,抱えている課題の解決に向 け,探究していく。また,2月の提 案発表会に向け,準備を行う。	復興への課題を発見し、仲間や地域 と協力しながら解決に向けて粘り 強く取り組んでいる。
地域の復 興提案発 表会	2月	1年間の活動の成果を発表する。地域の方にも参加していただき,復興提案を行う。 【発表形式:プレゼン or 演劇】	・1年間の探究活動の取り組みや学びを工夫して表現できる。 ・土崎の未来を創造し、前向きに発表している。
土崎港 曳山祭り	6月 7月	土崎の一大イベントである土崎港 曳山祭りに、探究活動で行っている 学習を生かし、参加する。	地域との関わりの大切さを学び, ふるさとに誇りをもつことができている。
秋田港での活動	9月 10月 11月	秋田港駅に寄港したクルーズ船を 迎え,探究活動の学習を生かし土崎 や秋田を世界に発信する。	探究活動での取り組みを発信したり,地域の方と連携して運営したりすることができている。
年間の振り返り	2月	1年間の活動の振り返りを行い,2 年生での探究活動の見通しをもつ。	1年間の活動を通し、今後探究していきたいことを明確にしている。

#### 5. 特別活動とのかかわり

テーマ	実施時期	学習活動	ねらいを達成した生徒の姿
復興ボラ	各学期	地域の復興ボランティアへの参加。	多様な他者と関わり、思い
ンティア	2回以上	【例】老人ホーム・幼稚園訪問	やりをもち、相手の立場に
活動		がれき撤去作業等	立って行動できている。

#### 6. 本時の実際

(1) ねらい: 探究活動を通して、地域の復興に貢献していくための見通しをつかめている。【ワークシート】

#### (2) 学習過程

※生徒の中には心に傷を負っていることを考え、どのような意見が出ても、認めるようにする。

	**生使の中には心に傷を負っていることを与え	え、どのような意見が出ても、認めるようにする。					
時間	学習活動	教師の支援を評価					
	1 前時の活動を振り返り,地域の復興	○前時の振り返りの例を提示し、自分た					
	に貢献する取り組みには何がありそ	ちにも地域の復興に貢献することがで					
	うかを考える。	きるということを想起させる。					
導入	前時の振り返り	○地域にどんな資源があるのかを考えさ					
20	・地域の復興に高校生が関わっていくことができると知れた。	せる。					
分	・地域の復興に貢献できるような取り組みをしてみた	【探究テーマの例:					
	い。	土崎港商店会,風力発電所,曳山祭り,   秋田港フェリー,道の駅あきた港,JR土崎駅】					
	F						
	2 学習課題 探究活動を通して、地域の復興に貢献していくための見通しをつかもう。						
	3 グループになり,探究していきたい	○生徒たちが活動のイメージをもてるよ					
	テーマとその理由を考える。	うに、各テーマで考えられる活動の例					
	【6人1グループ,計5グループ】	をプリントで配る。					
		○工夫した発表ができるようにまなボー					
		ドにキーワードなどを書くように指示					
		する。					
展開	4 探究活動のテーマを決める。	○生徒主体で決められるように、司会進					
70	【2分発表,3分質問】	行は学級代表が行う。					
分		○質問の際には、発表者に対して否定的					
/3		にならないことを伝える。					
	5 決まったテーマの探究に向けて見	○探究活動の見通しがつかめるように、					
	通しをつかむ。	現状の課題は何だと思うか、どうした					
		ら調べられるかなどを問う。					
		○グループ内での話し合いがそれている					
		場合は、地域の復興に貢献するための					
		探究的な活動であることを確認する。					
	6 本時の振り返りを記入する。	○地域の復興に、今後どのように関われ					
終結	・曳山祭りがどんな祭りなのかを地域の人に尋ね、地域	そうかの視点で振り返りを書くように					
10	のみんなで盛り上がれるような取り組みをしたい。 ・商店会の方から、土崎の復興の課題を聴き、自分たち	伝える。					
分	にできることや貢献できることを考えてみたい。	探究活動を通して、地域の復興に貢献					
		していくための見通しをつかめてい る。【ワークシート】					
		(a) 12 22 F					

参考資料:福島県の高等学校における創造的復興教育

復興対応:総合的な探究の時間の学習指導案(高等学校)

# 土崎復興プロジェクト

~地域の復興に貢献する探究活動を通して~

カリキュラム・授業開発コース 2518412 山口裕平

### 生徒・地域の想定

### 生徒たちの現状

- 段々と安心して学校生活を 送れるようになってきた。
- 優しい生徒が多い反面, 自分 自身に自信が持てず,困難に 立ち向かおうとする姿が少ない。

### 連携

### 地域の現状

- ライフラインの復旧は進んできたが、 復興は進んでいない。
- **曳山祭り**や**秋田港**での活動等を 基盤として,復興を目指している。

復興教育を通じて生徒に身に付けさせたい力

- ・仲間と協力しながら困難に立ち向かう粘り強さ
- ふるさとに貢献しようとする心
- ・取り組みや学びを発信・表現できる力

# 題材と主な活動内容

### 題材名:土崎復興プロジェクト

### ●総合的な探究の時間

① 復興に貢献したいテーマで探究活動と発表会

探究活動の • 土崎港商店会 • 風力発電 テーマ例 • 曳山祭り • 秋田港フェリー

• 道の駅あきた港 • JR土崎駅

プレゼンor演劇

② 土崎港曳山祭りなどの地域のイベントに参加し、地域と学校をつなぐ

### ●特別活動

各学期に2回以上,地域の復興ボランティア活動に参加 例:老人ホームや幼稚園訪問,がれき撤去作業,除雪 など

### 探究活動や地域貢献活動を通して、地域の復興に貢献

### 災害の想定

学校:A高校

(秋田市土崎港周辺にある高校と想定)

災害:巨大地震(秋田沖大地震M8.0)

発生:3年前

被害:多くの住宅や公共施設が倒壊

電気,水道,ガスなどライフラインの停止

現在:基本的な生活は取り戻しているが, 復興は進んでいない

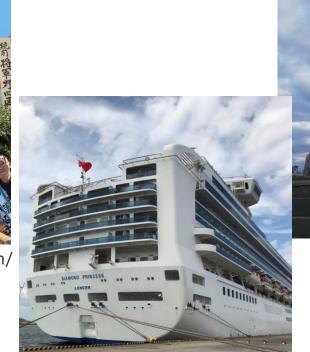
他県への流出や少子高齢化など地域とのつながりの悪化

### 学校と地域が連携した復興が求められている

### 地域の教育資源

- ●土崎港曳山祭り
- ●秋田港フェリー
- ●道の駅あきた港 (セリオン)
- ●風力発電所





豊富な教育資源を生かし、学校と地域が連携し復興へ

### 総合的な探究の時間の年間スケジュール

5月

### 地域の復興と現状

- 復興とは
- ・探究活動テーマ決め

本時の活動

6月

### 各テーマ探究活動

- ・地域の方と連携した活動や 現地調査など
- ・地域のイベントへの参加



復興提案発表会

・地域に発信,提案



現地調査による探究活動

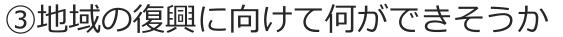
### 前時と本時の活動

#### ● 前時の活動

「復興とは何か」から私たちが地域に貢献できることは何か

①復興とは何か

②高校生が地域に貢献した例の紹介 例:東日本大震災での活動例



### ● 本時の活動

探究活動テーマ決め 地域の復興と現状

地域の復興に貢献するために探究活動のテーマを決め、見通しをつかむ 探究活動のテーマ例

- 土崎港商店会 発電(風力)
- 道の駅あきた港

- 曳山祭り
- 秋田港フェリーJR土崎駅

### 本時の活動

学習課題:探究活動を通して地域の復興に

貢献していくための見通しをつかもう。

### 探究テーマ相談

【探究活動のテーマ例】

- 土崎港商店会
- ・ 発電(火力・風力)
- 曳山祭り
- 秋田港フェリー
- 道の駅あきた港
- JR土崎駅

(6人1グループ)

本題材のまとめ

復興教育を通じて

育てたい力

### テーマの決定

- 司会進行は**学級代表**
- まなボードを使用し, 1 グループ **2 分で発表**
- ・3分間の質問時間

仲間との協力や 表現できる力

学校と地域が連携し, 復興することが求められている

#### 探究の見通し

- 日常生活などでの 疑問や気付きの整理
- 課題を見つけ,
- 予想・仮説の設定 調査の方法の検討

探究の

見方・考え方

### 探究活動の例が田港フェリー

### 地域の復興を世界に発信するチャンス



地域社会のつながりがなく, チャンスを生かしきれていない



現地調査等をし、課題を見つけ、 考えを出し合いながら解決へ





秋田港に寄港した ダイヤモンド・プリンセス号(イギリス)

363

#### 具体的には クルーズ船寄港予定日

高校生が <b>, 地域のパイプ役</b> になり,	寄港予定日	寄港船	乗客定員(人)
曳山祭りや商工会の方にクルーズ船 寄港を歓迎する活動を <b>提案</b> し,	10/3(木)	MSCスプレンディ ダ	3,274
企画・運営	11/14(木)	ダイヤモンド・ プリンセス	2,706

美の国あきたネット「2019年クルーズ船寄港予定について」より

# ・取り組みや学びを発信・表現できる力

生徒の実態

### 土崎復興プロジェクト

ふるさとに貢献しようとする心

探究活動や地域貢献活動を行い,地域の復興に貢献

#### 総合的な探究の時間

復興に貢献したいテーマで探究活動と 提案発表会

#### 【本時案の設定】

探究活動テーマの決定と 今後の見通しをつかむ

#### 特別活動

復興ボランティア等の**地域貢献活動**に 参加し, 地域とのつながりづくり

活動例

老人木一厶,幼稚園等訪問 がれき撤去作業

地域の現状

・仲間と協力しながら困難に立ち向かう粘り強さ



### 参考資料

- 1. 平成30年告示高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編
- 2. 福島県の高等学校における創造的復興教育 福島県立ふたば未来学園高等学校の取り組み
- 3. 土崎神明社例祭土崎港曳山祭り http://hikiyama.akitalink.com/
- 4. 美の国あきたネット 2019年クルーズ船寄港予定について https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/39240



### 研修内容

- ◇東成瀬小中学校への訪問
- ◇被災地への訪問

- ・小中連携校の学校・学級経営について学ぶ
- ・危機管理や防災教育を、実践から学ぶ
- ・教職大学院での学びを深め、新たな知見を得る

### 研修概要(日程)

### 1日目

11:00-13:50

東成瀬小学校見学

学校経営説明

15:30-17:15

教育行政説明

10:20-12:40

14:00-15:30 東成瀬中学校見学 ガイド 学校経営説明

高田小学校訪問

2日目

14:30-16:30 陸前高田語り部

### 3日目

10:00-11:30 大槌町語り部 ガイド



### 東成瀬小•中学校訪問

### 【東成瀬村の教育行政基本方針】

- 村だからこそできる教育(実態)
- 社会総参加の教育(個性の尊重)
- 継承と発展の教育(歴史と伝統)
- 地域社会づくりの教育(積極的参画)
- 創意工夫の教育(不易と流行)

「人は人のシャワーを 浴びて人になる」



### 東成瀬小•中学校訪問

### ・東成瀬村小中連携教育の内容

(1)知育部会:授業研究会 指導案検討会

乗り入れ授業

(2)徳育部会: 3つの心の育成(優しさ、協力、奉仕)

- (3) 体育部会: グランドゴルフ パークゴルフ 食育
- (4)その他:小中共通の「特色ある教育活動」
- ①探究型授業・授業基本パターン
- ②家庭学習•自主学習
- ③言語活動、内言・外言
- ④チャレンジピック・思考カコンテス h、村学習塾
- ⑤環境•掲示物

- ⑥読書、体験活動、話し合い
- ⑦異年齡活動
- ⑧ふるさと先生、ふるさとの歌
- 9情報共有
- ⑩小中共通実践事項・8項目

# 視したノート指導

東成瀬小学校の特色ある教育活動



①ノート展…問題解決の「過程」を重





④地域の年中行事の体験…ふるさと を愛し、豊かな心を育てる

⑤グローバル"夢"ミーティング...秋田 大学の留学生との交流



### 東成瀬中学校の特色ある教育活動

- (1)キャリア教育の推進(全校:「わが村体験活動」)
- ②「グローバル"夢"ミーティング」



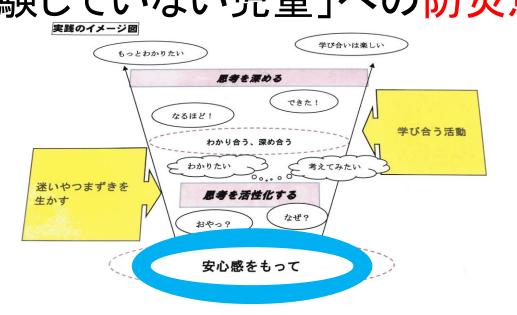
- ③「全校ミニ討論会」「全校ポスターセッション」 等による思考力、表現力の向上
- ④TSB活動(全校吹奏楽活動)
- ⑤TTの充実
- ⑥被災地(大槌町)との交流活動、 HMY音楽祭等での交流



### 陸前高田小学校訪問

- 〇東日本大震災で被災。
- ■震災前400名→震災後172名(H30年度)
- •「被災した児童」への心のケア
- ■「震災を経験していない児童」への防災意識





### 陸前高田小学校の様子

- 〇生き生きとした児童
- ・廊下にたくさんの児童の頑張りが掲示
- 学芸会練習の様子

郷土玩具俵牛 復活くびふりべーご









< 11 >

### 陸前高田市語り部ガイド



奇跡の一本松

- 空々とした迫力。 力強さを感じた。
- 震災復興のシン ボルとしての思い。



東日本大震災追 悼施設・復興まち づくり情報館

- 。震災当時のこと を目の当たりに。
- 災害に対する正 しい知識を持つこ との必要性。



陸前高田市内 見学

- 今なお工事中 の風景。
- 生活を取り戻すことの大変さ を実感。

### 被災地への訪問ー大槌町ー

- ◇大槌文化交流センターでの説明
- →地理的条件を把握しておく必要性
- ◇旧大槌町役場の見学
- →避難の判断と津波の恐ろしさの実感
- ◇城山公園の訪問
- →教訓と被災者と遺族の方々への思い

### 「自らが率先して避難者に!」





### 研修を終えて(岩手県被災地訪問)>

-各自の感想より-

- ・子どもたちにとって、学校は安全・安心 の場所になるような取り組みをチームでで きるようにしたい。
- ・実際に見ると想像できない程の被害で あったと感じ、被害の程度や自然の恐ろし さを感じ取ることができた。
- ・自ら非難する姿を示すことで、周りも逃 げる気持ちになれる。「自分も助けられな い人は他の人も助けられない」という言葉 の意味することにつながると感じた。
- ・みんなが逃げないから大丈夫という集団 意識の怖さを一人ひとりが知ったうえで自 分の行動を考えることが必要になると感じ た。



東日本大震災追悼施設



大槌町の様子

< 12 >

### 研修を終えて(東成瀬小中学校訪問)

-各自の感想より-

- ・授業においても、「探究型授業」に基づいたものが展開されていました。生徒の考えや思いを引き出すための工夫は参考になりました。
- ・自分の考えや思いを言葉にするという作業が人間にとってどれだけ大切か実感させられた。
- ・たくさんの人が子どもに関わり、多様な価値観に触れること で人間性が高まっていくと思う ので、そういった機会を設けて いきたい。



東成瀬小学校